

新しく、さらに充実する山口大学

夢をかたちに



加藤 紘
山口大学長

山口大学に大きな期待を抱いて学長に就任しました。それは学内に躍動するエネルギーを知っているからで、時代が動く時に素晴らしい可能性を生み出す力です。変化に疲れるかもしれませんが、日本国中で改革の機運が沈静化するかもしれませんが、それでも本学では、何処かで誰かが絶えず前進し続けていると確信しております。

法人化をチャンスに

さて、法人化が迫り組織の再編が論じられております。法人化については、外部の人たちの参加など新しい組織づくりが必要ですが、いずれにせよ事務系を中心に短期間に膨大な仕事が集まることと思います。力を合わせて乗り切りましょう。もっとも、大切なことは形より内容であり個人の力です。

しっかりした目標や計画を作り、またそれを着実に実現することに、我々の将来が掛かっております。全国の大学をリードできるような内容を持ちたいものですが、その意味では本学は着実に準備を進めてきました。東アジア研究科や応用医工学独立専攻、地域共同研究開発センターや山口TLO、時間学研究所、アドミッションセンター、留学生センター、メディア基盤センターなど枚挙にいとまがありませんが、一つ

ころですが、それを大学として組織的に支援できることになります。全ての学生が、自分に合った専門性を修得し、現代社会の必須能力であるコミュニケーション能力や情報技術を身につけ、更に折角山口大学に入学してくれたのだから山口独特の歴史的・文化的風土を学びその生き方を会得できれば、自信を持って世界に歩み出すことができます。



一つが関係者の優れた先見性と努力の賜物であり、本学の特徴を生み出す要です。

学部教育への思い

大学の最も重要な機能である教育を担う大学教育センターの誕生も時期を得たものです。大学として、全ての卒業生に豊かな人生を送ってほしい。これは大学の最も切実な願いです。教育の在り方について、既に各部署でそれぞれに工夫してきたと

IT時代に向けて

本学のIT化には定評がありますが、教育や研究など学内全て場で更に活用しましょう。ITの発達は印刷技術の発明以来の一大事件で、マスブロ的で一方向的な情報伝達から、個別的多方向的な情報の流れが生まれました。魅力的な電子教材の開発や効果的な教育評価の実施など、素晴らしい世界が広がる筈で、またそのためには学生や社会を惹きつけるだけの魅力的な情報内容の造り方を研

究しなければなりません。但し、ITと共にマンツーマンの少人数教育やチュートリアル教育の重要性も忘れないでください。ITは道具です。それを使う人間がみすばらしいと逆に害を及ぼします。

また研究や学外交流を推進するためには、少なくとも学内の情報を皆で共有したいと思います。これは情報公開や事務の省力化のためだけでなく、自らの意識を発展させるためにも重要で、共用した情報から新しいアイデアを貰い、あるいは領域を越えた活動を展開するために極めて大切なステップです。

学外交流について

国際交流や地域交流には二つの面で期待しております。産官公連携に代表される如く、人材や業績の交流を通じて互いに発展を計るのは勿論大切ですが、更に学外交流に期待するのは、良質な刺激の流入です。近い将来、国内の進歩の風潮は衰えるかもしれません。しかし東大を頂点とするヒエラルキーの底辺に、学生も教職員もどっぷり埋没して過ごす様な生活は我慢できません。世界は常に動いております。できれば一人一人がそこから具体的な刺激を受けて内部を動かして欲しいと思います。外からの圧力に押されるより、一歩先んじて外をリードの方が余程楽なものです。

意識を広げて世界へ

情報が学問領域や国の枠を越えて広がり、県境を越えた行政区分の創設さえ議論されております。負け犬気分で埋没するか、或いは例え小さくとも世界に通じる独自の魅力を持つかは、私達一人一人の気持次第です。意識を世界に広げていたいと思います。

新副学長の抱負

山口大学が法人格を持つことの意味



平野 充好
副学長 教授
経済学部経済法学科

2年後にすべての国立大学が法人化されようとしています。大きな組織が法人化されるというのに準備期間はわずかしかなかった。早急かつ適切な法人化対応が必要です。

大学は運命共同体

国立大学が法人格を持つということは、国立大学が、国(文部科学省)の一機関ではなくなり、独立の人格を持つ存在になることです。そのことは、国の庇護からはずれ、大学自らが、自分でその存続発展を考えていかなければならないことを意味します。いずれ国からの運営費交付金が十全なものでなくなり、財政的に自分たちの責任で組織の維持を図らなければならなくなります。この問題は財務担当として私に課せられた最重要課題となりますが、ここではむしろ法人格のもう一つの側面、山口大学が「一つの運命共同体」になるということを強調したいと思います。法人格を持つということは、名実ともに「大学が一つの存在」になるということです。だれもがそのことを認識すべきです。

大学は地域社会の一員

大学が法人として一つの存在になるということは、地域社会の一団体にすることを意味します。これまでは、国の機関として地域社会と関わってきたわけですが、これからは正真正銘、地域社会の中の一員として、地域社会のさまざまな諸団体と共に地域社会を作り上げていく関係にあります。山口大学は、これまで以上に、地域社会の一員であることを意識し、地域社会の人々と一緒に行動し、さらには、地域社会の大学への期待や要請にどのように応えていくかも真剣に考えなければならないのではないかと思います。

大学は個性的な目的団体

そもそも、法人格というのは目的団体に付与されるものです。大学は言うまでもなく教育・研究を目的とする団体です。しかし、国立大学法人ということになりますと、このような抽象的な目的ではなく、具体的な形で教育研究の目的を定めることが求められています。すなわち、「中期目標」、「中期計画」さらには「年度計画」という形で山口大学の目的(=進むべき方向)を設定しなければなりません。しかも、それらの目標や計画の実現度が第三者評価にさらされ、運営費交付金につながるということです。どのような目標・計画を立てるかが重要です。山口大学だからこその個性的な目標・計画設定を立て、その実現に向けて努力していくことが、山口大学の構成員みんなの課題です。

☎083-933-5524

E-mail:

hirano@yamaguchi-ac.jp

学生の視点に立って



小嶋 直哉
副学長 教授
工学部機械工学科

総務、地域・産学公連携、広報・社会活動、評価等を担当する副学長に就任いたしました。

国立大学の独立法人化への移行が、平成16年度を期して行われることは、ほぼ確実な状況になってきています。今後の数年間の行動は、これからの山口大学の在り方を大きく左右することは疑いの余地も無いことでしょう。このような変革は既に2年程前から急速に進んでいて、本学でも 中前学長を中心に活発な改革・運営が進められてきました。これからは益々、具体的な判断が大学に要求されますが、加藤学長のリーダーシップの下で大学運営における諸課題に、積極的に取り組んで参りたいと思います。

山口大学の教育研究の改革において、心に留めておくべき最も重要なことの一つは、学生の視点に立つことではないでしょうか。将来に対する漠然とした不安と期待をもって入学してきた学生諸君が、めまぐるしく変化する社会情勢を背景に、何かを“発見し”、“はぐくみ”、やがて大きな志を持って社会にはばたくことが出来たときに、最高学府としての山口大学の存在意義が、自他共に強く意識されるのだと考えます。

その意味でも我々は、現時点における山口大学の教育・研究を初めと

する諸活動に責務を持つだけではありません。現教職員は、将来の山口大学の在り方に関して今、決断しなければならない責務も同時にもっていることは言うまでもありません。山口大学が自らの将来の在り方をかけて、自らを律し、自らを決する存在でありたいものです。

中前学長が常々仰っておられたように、山口大学の源流である山口講堂が開設されてから200年目に当たる2015年を、どのようなアイデンティティーを持つ大学として迎えることが出来るのかを、強く意識して行動したいと思っています。

実学重視の教育環境



丸本 卓哉
副学長 教授
農学部 生物機能科学科
大学教育機構副機構長
大学教育センター長
学生支援センター長

国立大学の独立法人化が目前に迫り、全国的に構造改革や教育・研究に関する改善が積極的に進められています。山口大学でもこれらの諸課題の改善に取り組んできましたが、まだまだこれから解決しなければならないことが数多く残されています。この変革の大切な時に「教育と学生に関すること」を中心に担当する副学長として指名を受けましたことに対し、大きな責任を感じているところです。

「学生を大切にする大学」を目指して、微力ながら精一杯努力したいと願っています。

大学教育機構の充実

平成13年度より、「大学教育機構」が発足していましたが、平成14年度より再編し、新しく省令施設として設置された「大学教育センター」と「留学生センター」、および学内措置で設置した「学生支援センター」が配備され、著しく充実しました。近いうちに「健康管理センター」も大学教育機構に加わる予定で、「AO入試センター」を含め5つのセンターで構成されることになります。この大学教育機構は山口大学に学生が「入学して就職するまで」トータルに責任を持って対応する重要な組織です。今までと異なり、本機構内には併任および専任教官が約20名近く配置されており（将来、増える可能性もある）、山口大学での教育・研究を円滑に促進するための企画や実施を行える機構として活動することになります。

また私は、大学教育機構の副機構長としての責任も果たすことになっていますが、各センター長、教官および関係職員の方々のご協力を得ながら「特徴ある元気な学生を育てる山口大学」づくりに貢献したいと願っています。

連絡先：大学教育センター長室

083-933-5052

E-mail:

marutaku@yamaguchi-u.ac.jp

留学生センター紹介

新設のご挨拶と 概要説明



中村 幸士郎
教授 教育学部
留学生センター長

山口大学留学生センターは、本年4月1日、関係者の多大なお力添えにより、多くの期待を担って新設され、順調に発足致しました。4月23日に大学教育センターと合同で銘板取り付けと記者会見が行われ、同25日に二つのセンターの設置記念式典が挙行されました。関係の皆さまに心より深く感謝し御礼申し上げます。

つきましては、設置への背景と経過および業務内容の概要を簡単に説明致します。

設置への背景と経過

本学の留学生対策は残念ながら数年遅れていました。これを挽回するため、1年半前から留学生センターの早期設置に向け、下記の通り急ピッチで取り組んできました。

平成12年10月～翌13年3月：「山口大学学術交流・留学生センターワーキンググループ」を設置し、①本学の学術交流の理念と基本方針を策定し、②留学生センター設置に向けた基本調査、③将来計画の立案、④概算要求書の作成を行いました。

平成13年4月～10月：学内調整や

文部科学省への概算要求の説明と要望、同省からの質問状への回答、業務内容とねらいを示す概念図2種類の作成等を行いました。

平成13年11月～翌14年3月：「山口大学留学生センター設置準備委員会」「同ワーキンググループ」「同専任教官選考委員会」を設置し、①留学生センター規約の策定 ②山口地区と宇部地区の調整 ③専任教官の公募と選考 ④発足の諸準備を致しました。

また、全国初の国際企画課も今春本学に設置され、本学の国際化が画期的に進展することになったことも合わせてお知らせ致します。

目標と業務内容の概要

本学の留学生センターは、現在諸外国から日本国政府に対して緊急に要請されている国際教育協力の一端を担う、重要な役割を与えられています。

そのため、当センターは、山口大学の理念「発見し・はぐくみ・かたちにする一知の広場」に基づく、国際学術交流の四つの理念：①世界の多くの人々との交流 ②文化の相互理解 ③世界の将来を担う人材育成 ④科学・技術に関する情報の国際的展開、並びに、国際学術交流の四つの基本方針：①世界に開かれた大学 ②世界で活躍する人材育成 ③知的国

際貢献 ④地域の特色を生かした国際交流、を目標に掲げています。一言で言えば、学術の向上と文化の相互交流による世界の発展と平和維持が究極の目標です。本学では現在世界の44大学と大学間協定や学部間協定を結び、積極的に学術交流を図っています。

さて、留学生センターの主な業務は、留学生の受入、本学学生の派遣、各種の国際交流、留学生を中心とした地域との連携と交流です。日本語・日本事情の教育、生活指導と相談、各種交流、情報の受信と発信等を担当する専任教員数は、1名から一挙に5名に増員され、同時に新設された留学生課には4名の職員が移りました。センター長を加え10名の陣容となり、留学生へのサービスが格段に向上することとなりました。

しかしながら、実は、これまで広島大学留学生センターに委託してきた、大使館推薦国費留学生のための大学院入学前予備教育（日本語初級6ヶ月集中教育）を、今年度後期より山口大学で週15コマ開講することとなり、さらに工学部と医学部のために宇部分室を開設する関係上、必ずしも十分な陣容と言い切れないのが実情です。

本学には、今年4月1日現在、28カ国出身の244名の留学生が在籍し、32名が海外で学んでいます。かなりた





留学生センター教官(左から):渡辺・杉原・赤木・門脇・(中村)

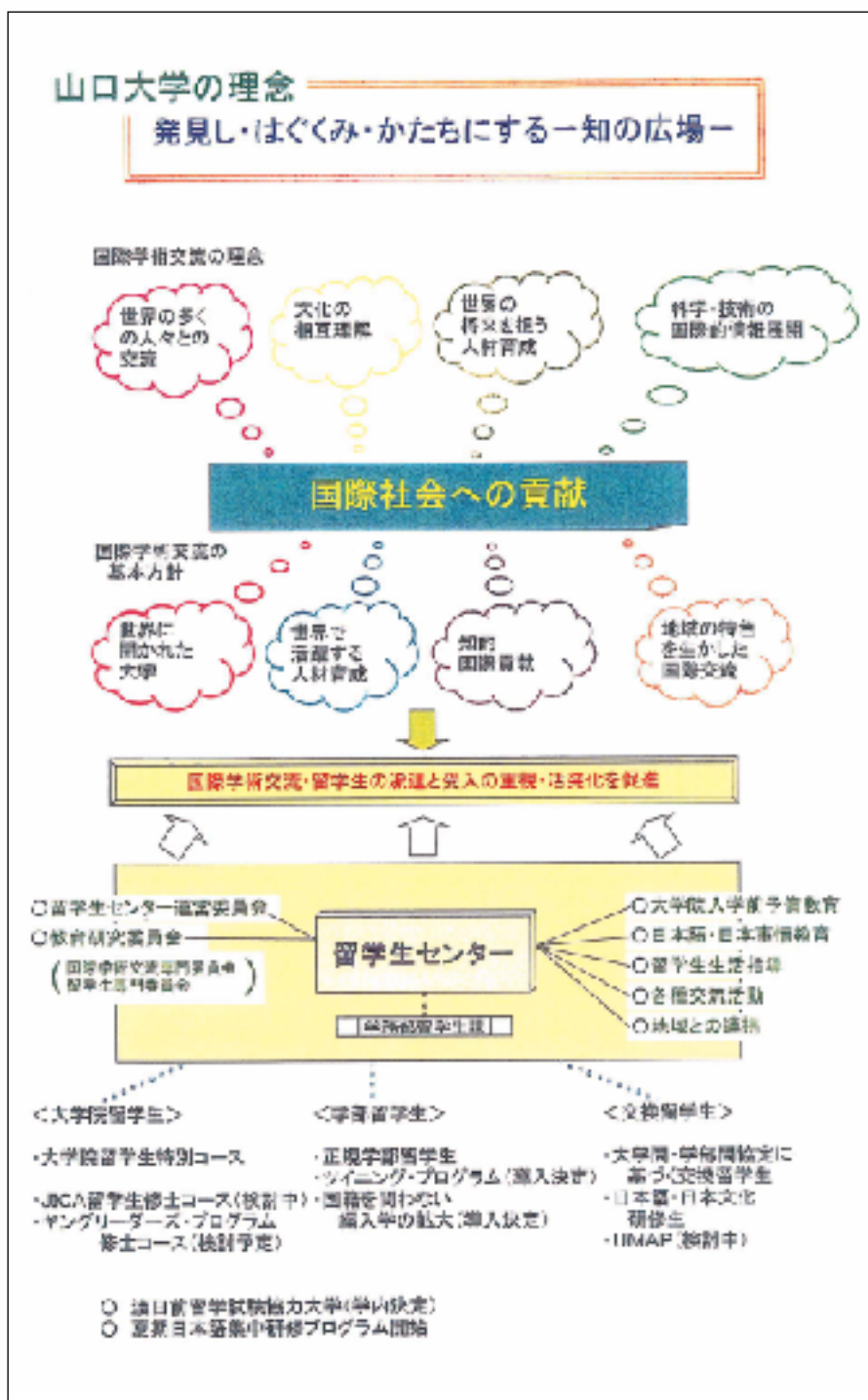


留学生課(左から):川本・水島・松岡・宮崎

の数にはなりましたが、全国の国立大学の対学生数の比率から計算すると、山口大学に期待される受入留学生数は現在430名であり、244名はその半数をやや超えている程度です。大学に対する厳しい外部評価を前に、早期倍増が緊急課題となっています。日本全国の留学生数は現在約8万人で、後2～3年で10万人計画が達成されます。その時には、山口大学は600名の留学生を受け入れる必要があります、今から必死の覚悟で取り組まなければ到底達成することはできません。特に、宿舎と奨学金が問題です。本学学生の海外派遣数についても、このところ停滞気味であり倍増が緊急課題です。様々な戦略を立てていますが、留学生指導教官はじめ多くの方々に平素のご協力感谢您と共に、更に一段のご支援をお願いする次第です。

留学生センターの合い言葉

山口大学留学生センターの合い言葉は、「留学生一人ひとりを金の卵を産む親鳥に育てよう」です。能力別クラス編成と半期3回の試験で日本語を鍛え上げ高度な専門教育に備えると共に、一人ひとりを温かく指導します。また、留学生は既に諸外国から預かった金の卵であり、貴重な宝物です。留学生交流を活発にし、本学のみならず山口県全体の国際化に



たいと願っています。

私の名前は松本幸四郎ではなく中村幸士郎ですが、最近の通称は「こうしろ、あしろう」です。ぜひとも気軽に声を掛けていただき、ご用命いただければ幸いです。

山口大学留学生センターは大学会館内の元レストラン跡に、宇部分室は工学部本館1階西角に設置されています。ぜひお立ち寄り下さい。

どうか引き続きご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

電話:083-933-5980

E-mail:

koshiro@yamaguchi-u.ac.jp

山口大学留学生センター・留学生課

753-8511 山口市吉田 山口大学

電話:083-933-5981~3

Fax:083-933-5988

E-mail:GA142@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp

宇部分室（工学部内）

755-8611 宇部市常盤台 山口大学工学部

電話:0836-85-9037

Fax:0836-85-9016

E-mail:yayoia@yamaguchi-u.ac.jp

大学教育センターの紹介

大学教育の 新たな出発



何 暁毅

助教授 経済学部 国際経済学科
大学教育センター教育評価部

教育を重視し、学生を大切に 大学を実現するために

廣中学長が座長を務め、取りまとめた「大学における学生生活の充実方策について」（平成12年6月）の報告は、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」へと提言しています。本学はそういう視点に立ち、「教育を重視し、学生を大切に大学」を学校の将来像の一つとして掲げました。

それを実現するため、平成12年度に共通教育システム見直しの「コース・カリキュラム検討WG」と共通教育の実施体制見直しの「全学出動体制見直しWG」を設置し、検討してきました。その結果として、本年度（平成14年度）から、「学生にとってなじみやすい大学」・「わかりやすい授業」を目指すことを基本とする「コース・カリキュラム」の導入を決定しました。そして、共通教育実施体制の改善として、実施責任母体である授業科目別部会を10部会から22部会に再編成し、学部選出教官による組織から、全教官が専門分野別にいずれかの部会に所属する全教官参加型の部会として立ち上げました。これにより、学生のニーズに沿った授業科目の設定及び授業

科目に適した教官を担当させることができ、共通教育に対する教官の责任意识を持たせることができるようになりました。

しかし、これらの見直しを実施するには、現存の共通教育センターという学内措置では、専任教官を配置できず、全学的な権限行使、指導、実施には限りがありました。そのため、より専門性の高い専任教官を配置し、センター責任者の指導の下、より独立制と権限を持った業務ができる実施体制が必要不可欠であります。

明確な目標、強力な実施体制

新設の大学教育センターは、山口大学における共通教育、専門教育を体系的に捉えた教育システムの実施、授業評価などの全学システムの実施並びに教育活動評価及び授業改善の企画などをより具体的、実践的にを行い、もって本学の教育活動の充実発展に寄与する事を目的としています。

これらの業務を実現するために、いままでにない強力な実施体制を及び実施組織を作り上げました。

大学教育センターには二つの部——教育企画・実施部及び教育評価部を設置しています。

教育企画・実施部はセンター長指名の主事の下、センター専任教官二人を配置し、大学教育研究組織に関すること、共通教育に関すること、専門教育に関すること、厳格・公正な成績評価に関すること、外国語運営能力の向上のための教育に関すること等について、企画・改善及び実施の業務を行います。

教育評価部は同じくセンター長指名の主事の下、センター専任教官二人を配置し、教育内容及び方法の改善と向上のための研修に関すること、教育活動評価及び授業改善に関すること、学生授業評価及び教官自己



メディア基盤センター設立

教育・研究・社会貢献 でのIT活用へ



松浦 満
教授 工学部 機能材料工学科
メディア基盤センター長

高度情報環境整備・活用が大変重要になっている中で、平成14年4月より山口大学総合情報処理センターが改組・充実され、山口大学メディア基盤センターが発足しました。

発足した山口大学メディア基盤センターは、

社会環境・情報コンテンツ部門
情報基礎ネットワーク活用部門
地域連盟・キャンパス活用部門

の3部門より構成されています。センターには、センター長(併任)副センター長(併任)の他、教授3名、助教授4名、助手2名計9名の専任の教官と技官3名で教育・研究・社会貢献でITを活用した大学の積極的な活動を支援すると共に関連の研究を推進します。

キャンパスが3つに分かれていることで、センターは山口、常盤、小串の各センターを設置し、本センター・分室の考えでは無く、どこも本センター、あるいは本センターはネットワークの中にあると考えています。そして大学全体の高度情報環境をどこのキャンパスでも活発に活用できる体制に向け努力します。

センターの今後の活動のキーの第

授業評価に関すること、自己点検評価及び外部評価に関すること、教育活動評価に基づく教官のインセンティブに関すること等について、企画・改善及び実施の業務を行います。

大学教育の質的向上に貢献する

大学教育、とりわけ教養・共通教育の質を向上させるため、実施責任を持つ大学教育センターの設立により、我が大学独特のコース・カリキュラムを導入・実施可能にするとともに、新設した全教官参加型の授業別部会を、授業担当と実施について責任を持つシステムとすることができました。そのため、多様な入学生に対して、選択自由度と体系的履修の両立を保証した多様な教育の実施と、学生のニーズに沿った授業科目の設定及び授業科目に適した教官を担当させることが可能となり、共通教育に対する全教官の責任意識も期待できるようになりました。センターはFD研修会を全学的体制の下で実施し、2～3年間に全教員を参加させ、統一したカリキュラムによる授業方法の研修を行うことによって、より効果的な授業が実現できます。

また、学生授業評価、教官自己授業評価を全学的に統一した方法で行うことによって、単に個々の教員の教育技術を高めるだけでなく、全教官

が問題意識を共有し、学生の履修達成度を把握して、学生に対する履修保証ができます。

さらに、教官の教育業績の評価を全学統一的な基準に基づいて実施し、インセンティブの実施が可能になります。

強力な指導力と責任を持って実践していく大学教育センターの設置は、山口大学の大学教育が新たな一歩を踏み出したことを示しています。大学教育センターの今後の活動が、本学の高等教育の質的向上に大きく貢献すると期待されます。

☎ 083-933-5065

Email:

hexiaoyi@yamaguchi-u.ac.jp

1番目は、[IT活用教育活動支援]です。従来からの先進的な遠隔講義システムに加え、学生へのノートパソコン導入に伴う活用へ向けた講義室整備を近年進めてきました。今後、教官と受講学生との間での各学習支援システムの導入、語学教育支援や教育コンテンツの配信整備を行うなど、講義内容・方法の工夫、高度化に向けた改善をセンターは積極的に支援したいと考えています。

第2番目は、[高度な学術研究活動支援]です。各種超高速計算処理やスーパーサイネット接続を含めたネットワークの環境整備を進め、またデジタル・AV機器の活用を含めた高度な学術研究展開への対応を進めます。第3番目に教育、研究の両面にも関係しますが、附属図書館と連携・協力し、学術情報のネットワーク活用、デジタル・マルチメディアコンテンツへの

対応を含め[電子図書館的機能の積極的な充実と活用]があります。

上記の3点及び第4番目のキーである教務関連を含め[事務業務の効率化への協力]と共に重要と考えておりますのは、第5番目のキーである[社会との連携・協力推進]です。幸い山口県地域は、山口県の情報スーパーネットワーク(YSN)が整備され、高速・大容量のネットワークが整備されています。これも積極的に活用させて頂き、各高等教育機関との遠隔講義・講演会・セミナー、生涯学習・リフレッシュ教育、企業等との共同研究・技術相談推進、社会人教育、小中高校との学校教育支援、遠隔医療、東アジアを含めた諸外国との交流など各種の活動の推進にセンターとしても積極的に協力していきます。特に山口県で発達しているケーブルテレビ網も活用した[情報発信型の活動]をキーワードにした活

動、及び、地域の情報技術の中核として地域活性化に結びつく活動を推進したいと考えています。

また、附属図書館とメディア基盤センターの連携・協力は高度情報化時代では必須の方向です。両者が協力し、地域社会における「知の広場」として大学機能を支援する中核的な組織として大きな役割が期待されています。今後、次年度に向けた予定として、「山口大学学術教育研究情報機構(仮称)」を設置し、一体的な運営をすることにより機能強化を図ることにしています。大学内でも地域にとっても存在感のある活動に向け努力したいと考えています。

☎&Fax 0836-85-9620

E-mail:

matsuura@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

山口大学
メディア基盤センター
Media and Information Technology Center

検索
検索
メニュー
サービス
各種申請・手続き
利用状況
センターについて
リンク
山口大学
山口大学附属図書館

テレビ会議システム
通常の会議室と同等の快適性を備えた遠隔テレビ会議システムです。
このシステムでは単に電源のON/OFFだけの操作で利用可能となりまして、運用のための担当者を用意する必要のないという使い易さに特色があります。

新着情報)))
平成19年度より「山口大学学術情報処理センター」は「山口大学メディア基盤センター」に改称いたしました。これに伴い、これからますます高度・多角化する情報技術、教育のためのサービス、基盤整備を進めていきたいと考えています。
また、ホームページも一新し、より外観の目立つわかりやすいページに実現したいと考えております。現在はまだ、旧ホームページからの移行作業中で十分な情報提供できておりません。ご迷惑をおかけしますが、旧ホームページへアクセスされる方は、こちらよりお願いいたします。

ご質問、ご要望は info-cc までどうぞ。寄せられる情報は公開される場合があります。当センターは、この URL で質問を受け付けています。

このホームページはMicrosoft Explorer5またはNetscape 6以上でブラウザをご利用ください。
info-cc@mail.cc.yamaguchi-u.ac.jp
Copyright © Media and Information Technology Center 2002 All Rights Reserved

医学教育のIT化— 電子シラバス・サイトの 構築をめぐる



川崎 勝
助教授
医学部
医学教育センター副センター長

インターネットにアクセスできる環境にある方は、まず何はともあれ、

http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~med_syllabus/

にアクセスしていただくと幸いです(図参照)。

そこに山口大学医学部医学科の電子シラバスが存在します。

残念ながら、現時点では、私たちのシラバスの最大の特徴である1回1回の授業の図表やスライドやpdfも含んだ内容の詳細を収めた部分は山口大学の学内LANからアクセスしたときにしか見ることはできませんが、それ以外の部分(これだけでもかなり豊富な内容であると自負していますし、近い将来に公開範囲をできるだけ広げたいと考えております)は世界中どこからでもインターネットにアクセスできさえすれば内容を閲覧することができます。とりあえず、上記URLにアクセスしていただけたならば、まず「はじめに」の「1. 電子シラバスサイトの構成と使用法」のところだけでもざっと目を通していただくと幸いです。

そこに、文字通り「電子シラバス・サイトの構成と使用法」について公式の説明を記しておきましたので、ここでは、

やや裏話的な話をしたいと思います。

1. シラバスって何?

日本で「シラバス」というと90年代に入ってぼつぼつと輸入されはじめ、90年代後半から現在までの間に急速に普及した存在に他なりません。実のところ、現在に至っても日本の大多数の大学教員の意識において、シラバスといえば、年度末が近づくと来年度の準備の一貫として仕方なく書かされる、授業全体の概要に毎週の授業題目(それと1回の授業につきせいぜい2,3行の説明)をまとめたものに過ぎないように感じます。

山口大学医学部は約5年前に医学教育の改革に本格的に着手し、まずカリキュラムの抜本的再編成を行うとともにシラバスを充実させることを改革の大きな柱と位置づけました。その際に、シラバスの本家本元であるアメリカのメディカル・スクールのシラバスの実物を取り寄せ、徹底的に研究しました。その結果到達した結論は、シラバスとは単に授業の概要と見出しを並べたものではなく、多数の図表込みの授業内容の詳細や、学生の日々の学習に有用な内容をすべて含んだものであるということでした。必然的に量的に膨大なものになります。イメージとしては、「シラバス」というよりも、むしろ「テキスト」といった方がずっと近いです。

それでも、私たちは世界で最も医学教育が進んだ国にも負けないカリキュラムとシラバスを作ろうと決意しました。そのために、わずか8カ月の間に、講師以上の全教官を対象として合宿のワークショップ形式の研修(FD)を行うことを皮切りにして、諸々の改革のための手段を講じてきました。

2. 電子化の意義は

さらに大きな第二の決断は、質量と

もに豊かなシラバスを最初から電子化された形態で提供するように決定したことです。

実際にシラバスのサイトを構築し、運営して1年が経過してみても改めて痛感することですが、電子化するとは単に「ペーパーレス化」することだけを意味するものではありません(もちろん、実際に印刷したら、紙の束が山のようなになるので、ペーパーレス化も重要なポイントではありますが)。

これにより医学部の専門教育で修得すべきすべての知識・技能・態度が有機化され、一体化された全体像が誰の目にも明らかになりますし、ひいては総覧し、検索することが可能になります。

例えば、心臓なら心臓で、医学教育の全課程において繰り返し繰り返し登場してきます。解剖学的にも、生理学的にも、病理学的にも、さらには内科的にも、外科的にも本当に様々なアプローチで段階的に心臓に迫っていきます。あるいは、がんならがんという病気に関しても、やはり様々な切り口から扱われます。もし紙で印刷されていたら、何十冊もの冊子のあちこちをめくらなければなりません。目的とする箇所をすべて探し出すだけでとても作業量になります。これが電子化されることにより、1回の検索作業で該当箇所をすべて拾い出すことができます。

こうした検索が可能であるということは、新たな可能性を提示します。それは、医学教育において修得すべき知識・技能・態度を、一教員の側が提示する順序やアプローチを越えて—自分自身で新たに再構成し、再構築していくことが比較的容易にできるといえる可能性です。

これは医学教育におけるまったく新たな可能性であると言っていいと思います。

3.成長する電子シラバス

電子シラバスは、2001年4月に運用を開始しました。それが当初の予定ではありましたが、サイト構築の過程で様々なトラブルが生じ、率直なところ、かなり無理を重ねた結果の、見切り発車に近い形でのスタートでした。

本当にうまく運営・活用できるのか不安で仕方ありませんでしたが、それから1年が経過し、かなり無理をしたとはいえ、あのときにスタートさせてよかったと心底から思っています。

実際に運用したからこそ、はじめて見えてきた改善点が多々ありますし、また、実際に日々の学習に使用している学生さんたちから様々な要望をよせてもらうことができました。これらをすべ

て改訂作業に活かすことができ、2年目にしてかなり使い勝手を向上させることができたと自負しています。

私たちの電子シバラスは、図表や資料やキーワードが大幅に充実した結果、2年目にして、約2万8千ものファイルから構成される巨大なサイトとなりました。容量も、視認性を損なわない範囲でギリギリまで画像を圧縮しましたが、それでも約500MBとなっています。同時に、全文検索機能の搭載をはじめ、検索機能の大幅向上をはかり、全体の見通しを損なわないように全力を尽くしました。

今年度のもうひとつの大きな特徴は、1回1回の講義を学生がオンラインで評価する教育評価システムを電子シバラス・サイトに統合したことです。

この結果、単なる電子「シバラス」(欧米的意味での)というよりも、より総合的な「電子教育システム」に向けて、その第一歩を踏み出せたように感じています。

最終的に名称をどのようにするかはさておき、「電子化」がさらなる改善の道筋を指し示してくれたことは事実ですし、今後さらにその方向の実現に向けて努力していきたいと思います。このような「電子シバラス・サイト」を日本ではじめて構築できたことを私たちは誇りに思います。

☎&Fax 0836-22-3747

E-mail:

kawasaki@yamaguchi-u.ac.jp



出前講義・進学説明会で 志願者増加



馬田 哲次
教授
経済学部経済学科

志願者確保のため出前講義・進学 説明会へ参加しました。

出前講義と進学説明会への参加を始めた目的は、18歳人口が減少し、志願者の減少が予想される中で、今後志願者の確保ということが重要な問題となってくることが予想されているからです。その対策として、少し余裕のあるうちから初め、ノウハウを蓄積しておいたほうがいいのではないかと思います。

また、最近の高校生の進路指導のやり方として、高校1,2年生の時に自己の将来像を明確にし、それを実現するために適した学部を選択させる。そして、その時に決めた学部をあまり変更しないことがあります。出前講義の対象者は高校1,2年生が主なので、その段階で経済学・経営学・法学等に対する興味を持つと、2年後、3年後の志願者確保に繋がることになります。

出前講義・進学説明会はこんな様子でした。

出前講義は、写真のようなパンフレットを作成し、山口県、福岡県、広島県の高校にDMを送付しました。費用は高校持ちということでどれくらいの

希望があるか不安な面もありましたが、経済学部から延べ23人が出前講義に出かけました。私も参加して分かったのですが、進路指導や総合的な学習の時間の一環として、そのための予算が組んであるようです。私が参加した高校では、専門学校、短大や大学の先生を10人位集め、生徒が希望する先生の話を聞くというようになっていました。1回の講義時間は60分から90分でした。

進学説明会は、様子がよく分からなかったこともあり、可能な限り参加することにしました。特にAO入試を始めたこともあり、その宣伝、説明が中心になっていたように思います。進学説明会はブース形式が殆どで、説明を求めに来た生徒や保護者の方等に対して説明をすることになります。私立大学では、入試問題や大学の説明が入ったCD-ROMを配布したり、パソコンで説明をしたり、アンケートを書いてもらいボールペンをプレゼントしたりと、様々な工夫を凝らしていました。

4年度入試の志願者が増えました。

進学説明会に精力的に出かけていった甲斐があつてか、初年度のAO入試のエントリー者は募集人数の5倍以上になりました。さらに一般選抜の前期日程では13年度入試を上回る志願者がありました。今まで志願者がいた高校から安定的に受験してもらうとともに、新たな高校からの出願を増やすためにも、進学説明会への参加は必要不可欠だと思います。2001年度はとにかく回れるだけ回ろうということで回りましたが、2002年度はその結果を踏まえて、より効果的な地域を選んで回ろうと思っています。また、参加していない学部についての説明を求められることもあるので、学部間の連携がうまく取れるとより効果的なものになるかと思います。

出前講義に関しては、大学で学ぶ

「学問」についてイメージをもち、入学までに必要な勉強をやろうという気になるのが一番だと思います。特に「経済学」は文系の科目でありながら、「数学」が必要であることを理解しておくことが、入学後「こんなはずではなかった」という思いや、留年・退学等を少なくする効果が期待できるのは大きいことだと思います。

☎&Fax:083-933-5557

E-mail:umada@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp



お問い合わせ 山口大学経済学部

〒753-8514 山口市吉田1677-1
学務第一係 TEL083-933-5506 FAX083-933-5509
E-mail
EC194@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp
インターネット・ホームページ
<http://www.econo.yamaguchi-u.ac.jp>

《経済》

氏名	所属	担当科目	テーマの一例
教授 吉田 浩	経済学系	経済学概論	経済学の日本経済への応用と発展
教授 山口 隆	経済学系	経済学概論	経済学の発展と応用
教授 山口 隆	経済学系	経済学概論	経済学の発展と応用
教授 山口 隆	経済学系	経済学概論	経済学の発展と応用
教授 山口 隆	経済学系	経済学概論	経済学の発展と応用
教授 山口 隆	経済学系	経済学概論	経済学の発展と応用
教授 山口 隆	経済学系	経済学概論	経済学の発展と応用
教授 山口 隆	経済学系	経済学概論	経済学の発展と応用
教授 山口 隆	経済学系	経済学概論	経済学の発展と応用
教授 山口 隆	経済学系	経済学概論	経済学の発展と応用

《経営》

氏名	所属	担当科目	テーマの一例
教授 山口 隆	経営学系	経営学概論	経営学の発展と応用
教授 山口 隆	経営学系	経営学概論	経営学の発展と応用
教授 山口 隆	経営学系	経営学概論	経営学の発展と応用
教授 山口 隆	経営学系	経営学概論	経営学の発展と応用
教授 山口 隆	経営学系	経営学概論	経営学の発展と応用
教授 山口 隆	経営学系	経営学概論	経営学の発展と応用
教授 山口 隆	経営学系	経営学概論	経営学の発展と応用
教授 山口 隆	経営学系	経営学概論	経営学の発展と応用
教授 山口 隆	経営学系	経営学概論	経営学の発展と応用
教授 山口 隆	経営学系	経営学概論	経営学の発展と応用

《国際》

氏名	所属	担当科目	テーマの一例
教授 山口 隆	国際学系	国際学概論	国際学の発展と応用
教授 山口 隆	国際学系	国際学概論	国際学の発展と応用
教授 山口 隆	国際学系	国際学概論	国際学の発展と応用
教授 山口 隆	国際学系	国際学概論	国際学の発展と応用
教授 山口 隆	国際学系	国際学概論	国際学の発展と応用
教授 山口 隆	国際学系	国際学概論	国際学の発展と応用
教授 山口 隆	国際学系	国際学概論	国際学の発展と応用
教授 山口 隆	国際学系	国際学概論	国際学の発展と応用
教授 山口 隆	国際学系	国際学概論	国際学の発展と応用
教授 山口 隆	国際学系	国際学概論	国際学の発展と応用

《法律》

氏名	所属	担当科目	テーマの一例
教授 山口 隆	法学系	法学概論	法学の発展と応用
教授 山口 隆	法学系	法学概論	法学の発展と応用
教授 山口 隆	法学系	法学概論	法学の発展と応用
教授 山口 隆	法学系	法学概論	法学の発展と応用
教授 山口 隆	法学系	法学概論	法学の発展と応用
教授 山口 隆	法学系	法学概論	法学の発展と応用
教授 山口 隆	法学系	法学概論	法学の発展と応用
教授 山口 隆	法学系	法学概論	法学の発展と応用
教授 山口 隆	法学系	法学概論	法学の発展と応用
教授 山口 隆	法学系	法学概論	法学の発展と応用

《社会と文化》

氏名	所属	担当科目	テーマの一例
教授 山口 隆	社会学系	社会学概論	社会学の発展と応用
教授 山口 隆	社会学系	社会学概論	社会学の発展と応用
教授 山口 隆	社会学系	社会学概論	社会学の発展と応用
教授 山口 隆	社会学系	社会学概論	社会学の発展と応用
教授 山口 隆	社会学系	社会学概論	社会学の発展と応用
教授 山口 隆	社会学系	社会学概論	社会学の発展と応用
教授 山口 隆	社会学系	社会学概論	社会学の発展と応用
教授 山口 隆	社会学系	社会学概論	社会学の発展と応用
教授 山口 隆	社会学系	社会学概論	社会学の発展と応用
教授 山口 隆	社会学系	社会学概論	社会学の発展と応用

※ 本学では、各学系・学部・学部の設置・変更等について、あらかじめ公表し、関係者の意見を聴き、必要に応じて調整を図ります。また、本学では、各学系・学部・学部の設置・変更等について、あらかじめ公表し、関係者の意見を聴き、必要に応じて調整を図ります。

装い新たに、 前進する理学部！



飯石 一明
教授
理学部
化学・地球科学科

山口大学新聞に理学部廊下の記事

5年前の山口大学新聞の一面には、ティーチャー・オブ・ザ・イヤーに選ばれた山本文学部長の記事が大きく報じられました。その裏面には、小さな記事でしたが、**時間の止まった暗い理学部**という見出しで、「動いていない時計、暗くて怖い理学部の廊下」のことが書かれていました。

当時、外部評価を受けるに際して、学生へアンケート調査を行ったところ、女子トイレが少なすぎる、エレベータがほしいなど、建物の狭隘さ、暗さ、不便さなどに対して非常に多くの要望がありました。もちろん教官や事務サイドからも悲痛な叫び声が上がっていました。

点検・評価を基に面積の再配分 →教育研究活動の活性化のために オープン化

大学院理工学博士後期課程の新設、前期課程の拡充、学科の改組・拡大に伴ない学生数は大幅に増加しました。しかし、文科省は、国立100大学がどこも同じようなのだから、思い切った案を持ってこない限り、建物の要求は認められないとのことでした。

そこで、建物に関する点検・評価を

実施し、思い切ったオープン化（それまでの40%から82%へ倍増）を学部内決定しました。

キャッチフレーズは、①占有面積を最小限とし、講座・学科の枠を超えた共同スペースを確保、②教育研究の多様化・流動化に対処、③講義室の学部間共同利用を図り稼働率UP、です。

全体像として教育ゾーン、研究ゾーンおよび管理ゾーンを明確にするゾーン構成を打ち出し、分散化→集中化、教官室→南棟に集約、農学部との複合研究、人文学部との事務集中化、を計画しました。

移転・移転・移転・移転・移転

1年で13,000㎡の建物を全面改修する。ある教官は「出来っこない!」と叫びました。しかし、とにかくやるしかありません。講義や会議、入試のための室、あるいは倉庫の借用において、事務局や他学部に大変お世話になりました。

教官は5度にわたる移転に気持ちよく協力しました（研究面では相当なダメージがありました）。学生は移転に際してはとても献身的に手伝ってくれました。事務の方の用意周到、適切で迅速な対応は実に見事なものでした。

第3期工事の北棟が完成して初めて足を踏み入れたときは、全体的に明るいこと、エレベータがあること、トイレがとてもきれいになったことに感動しました。

明るく快適な理学部に！

全室が冷暖房完備になり、新築と変わらない快適な環境になりました。北棟と南棟の各階に設けられたラウンジからは、外の景色が展望できるとともに、学生が気軽に休息をとることができます。

また、学生が自由に利用できる情報コンセントが多数備えつけられたラウンジや学生情報センターもありますし、全室に情報コンセントが設置され、大・中講義室の全ての机にも情報コンセントと電源コンセントが設置されました。さらに、理学部棟のどこにいても無線LANが利用できる環境になりました。各講座の学生実験室は見違えるように立派になりました。

キャッチフレーズ的には、「**機能的陳腐化の改善→研究活動の活性化、安全性の充実**」、「**物理的劣化の改善→耐震補強を兼ねた改修、高い安全性・快適な施設**」ということになります。

時間とともに前進する理学部

理学部はこれらの施設整備に 대응して、情報化時代にふさわしい教育研究を行います。研究活動の活性化から生まれた成果を世界に発信します。「学生による授業評価」も積極的に取り入れて授業の改善を図ります。今年度からはサイエンス・ミニ・カレッジを開設し、地域への貢献を積極的に行います。

☎(083)933-5742

E-mail: iishi@yamaguchi-u.ac.jp

「プロジェクト21」への期待



大坂 英雄
学部長 教授
工学部
機械工学科

1.工学部の活性化に向けて

国立大学の変革が強く求められているとき、工学部は何から着手して、どこに向かえばよいのであろうか、と問われています。個々の教職員の努力はこれまでも十分なされてきており、評価という締め付けから、もはや限界に近い(教育・研究という側面に時間を割くことが難しくなった)状態にあるように見受けられます。このようなとき、私達は一体どのようにすればよいのでしょうか。

道はないといったがよいのか、あるといったがよいのか分かりませんが、夢を描ける方向に進むのがよいと思われます。その一つとして、研究大学を目指すとき、山口大学工学部の特徴を前面に打ち出して、オンリーワン大学を志向するのが得策であり、工学部の教職員が望む方向でもあるといえます。

2.特徴は何か

組織の活性化とは、がんじがらめの構造から柔軟な集合解散ができるシステムへの変革であるでしょう。それでは新しい柔軟な構造体(プロジェクトと呼ぶ)を作る必然性、きっかけ、動機はどこにあるのでしょうか。ずばり、そ

れは強い研究分野のプロジェクトを強くすることしかないと思われます。おそらく、強い使命感、責任感、満足感、達成感を持って進んでいる分野がこれにあてはまり、そこでは日夜、新しい、そしてこれまでには考えられなかったアイデアを成長させる作業が強固に、継続的に行われているものと想像されます。それこそが期待できるものであり、私達が育成していくべき卵であり、宝物であるといえるでしょう。

それを見つけ出す方法は簡単です。つまり、そのような活動を日常的に進めているグループから提案してもらうことです。手を挙げたグループの中から、厳密な評価(必ずしも公平といわれる審査ではない)を通して、大きく成長させたいプロジェクトを採択すれば、最も効果的で、戦略的に飛躍させることが可能となるものと思われます。

3.プロジェクト21

これまでに述べたような背景の下に、学部内で教育研究、学術研究、組織戦略研究等について、プロジェクトの提案をお願いすることにしました。もちろん、学部長裁量経費を1500万程度つぎ込むことも、学部内で了承をいただきました。提案期間はわずか1ヶ月という短期間にも拘わらず、さすが工学部です、23件も応募がありました。1件当たり10人前後のメンバーが担当しますので、ほぼ全員の教官が何らかのプロジェクトに関係するという熱意の表れであったと思います。いかに工学部の教官が活性化された環境に置かれ、もちろん自らそうしているのですが、活動(教育に、研究に、そして地域貢献に)をしているのかをあらためて知ることができたよいチャンスであったと思っています。とにかく、プロジェクトとして立ち上げることは前向きな姿勢であると同時に、攻めの体制であり、形を変えて新しく何かを作り出す作業のあらわれですから、活性化の要

素を全てもった具体的行動といえるでしょう。

4.何が生まれるか

各プロジェクトが目指す目的、目標は異なりますが、こぞって新しい何かを生み出すために挑戦する意欲は十分なものです。これを機会に大きいプロジェクト(国プロ)へ飛躍させること、研究所の性格を持ち、東アジア地区の大学との連携によるプロジェクトを推進しようとするもの、教科書を工学部のカリキュラムに最適なものとして作り上げる意図をもったもの等、様々な内容を含んでいます。だからこそ、おもしろく、楽しく、発展が大いに期待できるプロジェクト構想であると思っています。一年間の成果は、評価委員会で評価を受け(活動報告書、実績の報告会)、次年度への継続、打ち切りが明確にされることになっています。プロジェクトの期間は基本として3年間を目途としていますが、その時点になった時も次の秘策を考え脱皮できるプロジェクトに発展して欲しいと願っています。

工学部に待望の 福利厚生棟の完成

兵動 正幸
教授
工学部
社会建設工学科

1.はじめに

工学部キャンパスは、本部キャンパスから離れ単独の学部として存在していることから、学生の福利厚生施設の面では本部に比べ貧相な感がありました。これまでは、昭和32年に図書館の一部として建築された建物を売店及びサークル棟に改修したものと、昭和53年度に設置された学生食堂(480㎡)のみでありました。学生数は当時と比較すると倍増しており、最近では約3,000名の教職員・学生が狭い環境の中で生活しておりました。この度の施設の完成は、工学部にとって画期的なことでもあります。

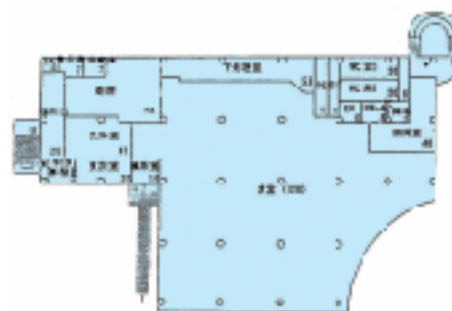
2.建物の概要

建物の外観は写真に示すとおりです。色調はグレーのタイル調で、落ち着いた感じの建物です。3階建ての建物で、1階はラウンジ、生協売店、喫茶室(28席)、自習室・喫煙室等です。2階は、食堂となっており、300席を揃えてゆとりのある空間を保っています。3階は、多目的ホールと共用室となっています。

3.利用時間及び各部屋の案内

福利厚生施設の利用は、月曜から土曜までの8時から22時までできるようにしています。環境美化のために、全館禁煙とし、喫煙は1階喫煙室のみ可能となっております。1階の売店は、多くの専門書をはじめパソコンなどの情報機器、学生生活に必要な用品などの展示販売、あるいはカタログによる注文販売を行っています。喫茶室は明るいうつたりとしたスペースで、教

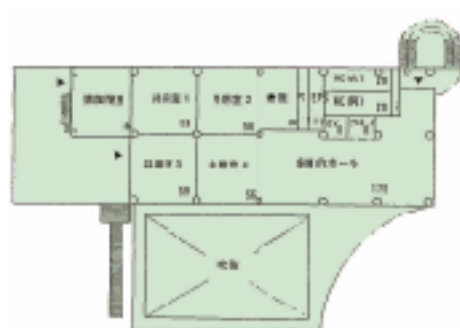
職員・学生等の団欒の場として利用されています。夕方には、小規模の懇親会や学会レセプションに使われることもあります。また、共用室(自習室)には情報コンセントが整備されており、インターネットを利用した学習の場として利用出来ます。2階の食堂は、営業時間は昼食のみならず、朝・夕食ができるように8時から20時までの営業となり、懇親会やパーティなどにも利用出来るようになっています。3階の多目的ホールは、この建物の中では一番見晴らしの良い場所で、勉強や団欒の場所としては最高の場所です。共用室はサークルのミーティングや音楽系サークルの練習の場となっております。建物の前庭には、ウッドデッキがあり、テーブルと椅子が配置されており、好天時には学生の憩いの場となっております。今後、この福利厚生棟と図書館、講義棟、体育館を結ぶスペースを学生のコミュニケーションゾーンと位置づけ、環境美化と設備の充実を図りたいと思っています。



2階



1階



3階

教育学研究科 更なる充実へ： 学校臨床心理学専修の挑戦 (第1種指定校として)



堂野 佐俊
教授

大学院教育学研究科
学校教育専攻：学校臨床心理学専修

大学院教育学研究科「学校臨床心理学専修」は、「臨床心理士」養成のための大学院として、(財)日本臨床心理士認定協会から第1種指定校として認定を受け、平成13年度からスタートしています。

誕生の経緯

本研究科は、平成3年に「学校教育専攻」と「教科教育専攻」の2専攻で設置されました。学校教育専攻は学校教育専修のみで、その中に、「教育心理学」領域は独自のコースとして発足しました。その後、学校教育や社会教育を巡る環境は急激に変化し、「心のケア」の専門家を求める要請は益々大きくなってきました。私達は、こうした問題に適切に対応できる人材の養成を目指し、カウンセリングや心理相談など臨床心理学的研究・実践に力点を置いた教育活動を展開してきました。平成7年度の学部改革により、学部には教育・臨床心理学に関する組織(教室)を独立させ、附属教育実践総合センター内には「心理教育相談室」を開設し、専任教員の配置と客員教授の着任も認められました。

学校や地域において心理臨床のリーダーとなり、臨床心理学に堪能な

高度な人材の養成を目指すという理念に立ち、研究科も改革に着手し、平成12年度には、学校教育専攻に、コースが独立した形で、「学校臨床心理学専修」を開設しました。設置にあたり、その優れたスタッフと充実したカリキュラム等が、第1種指定の大学院として評価を得たのです。因みに、第1種指定は国立大学では数少なく、当時、中国地区で唯一でした。

背景と特徴

複雑多様化する現代社会が求める広範な臨床心理学の専門家の養成を目指しますが、特に教育学研究科の中に位置づく専修として、学校や地域社会の教育場面における子どもの生きる力の育成や心の教育の支援者として高度な研修を積むことにも力を入れています。

この精神は、学部における「教育心理学」教室の教育方針とも呼応するもので、いわば6年一貫の教育課程と考えることができます。

今日的課題と考えられる様々なじめ・不登校・対人関係スキルの問題など、適応上の困難を示す人々への心理学的援助に関する専門的な知識と技術を多角的に修得することにより、学校や地域における「心」の専門家として、保護者や教職員、地域の人々が抱える

諸問題に対して適切な援助ができる人材を養成することができると考えています。

充実したカリキュラム

他大学に先駆けて準備した充実したカリキュラムとスタッフは、広範かつ専門性豊かなもので、第1種指定校に相応しいものと考えられます。臨床心理学に関する科目はもちろん、教育心理学、発達心理学、人格心理学、社会心理学、さらに家族心理学や障

害児心理学など、極めて幅広いものとなっています。これら専修独自の科目とともに、専攻に共通に開設されている「教育学」、「幼児心理学」、「障害児教育学」に関する諸科目、「教育メディア」や「国際理解」に関する科目等も準備されています。

本専修の性格に鑑み、心理臨床の実践的学習・研修という観点から、臨床心理学に関する実習には特段の配慮がなされています。付設の「心理教育相談室」における日常的なスーパーヴァイジングの積み重ねの他、附属養護学校での参加実習も行います。また、「山口県精神保健福祉センター」での実習、医学部「附属病院・精神科神経科」、「小郡まきはら病院」での実習でも実践的な力をつけるようなシステムとなっています。

入学希望者と修了後の進路

「心の世紀」といわれる現代社会を反映してか、また、国立の第1種指定大学院の数がまだ少ないこともあり、本専修への入学希望者は年々飛躍的に増加し、定員の8倍を越える競争率となっています。

教育学研究科・学校教育専攻の中に位置づく専修であり、高度に洗練された教育者としての活躍はもちろん、「臨床心理士」資格を取得して心理臨床の世界で、病院心理士やスクールカウンセラーなどとして活躍している者もいます。今日、臨床心理学士の絶対数が少ないないといった現状もあり、今後、各方面での活躍が期待されています。

「よい授業」をめざして

——人文学部のFD活動——

豊澤 一
助教授
人文学部
人文社会学科

“FD気運”の浮上

13年度、FD委員会が新設され、人文学部の教員能力開発（FD）活動が緒につきました。

もちろん、今までにも、個々の教官が、またコース・研究室単位で、教育能力向上と授業方法改善に、さまざまな努力と工夫を重ねてきました。しかし、学部単位の活動に限れば、人文学部は少々立ち後れていたかもしれません。そもそも人文諸学においては、（他の学問にもまして、）何らか一定の情報の獲得とその応用とをもって能事畢れり、というわけにはいきません。研究の姿、知のたたずまいこそが重要です。また、人文諸学に通底する何らかの基礎的情報があるかとなると、少々厄介な問題でしょう。したがって、授業方法も、共有になじまない個性的なあり方がめざされていた、と言っているでしょう。

それでも、個々の教官がいただいていた、授業をよりよいものにしたいという欲求は、近年のFD活動の昂揚に刺激されて、学部の気運として浮上してきました。その具体化が学部FD委員会新設です。

プラス面のクローズアップ

委員会では、たとえ研究分野が異なり、授業内容が異なろうとも、教官が相互に授業の工夫談や失敗談等を交わすならば、必ずや参考になり刺激になるであろう、との意見が支配的でした。それでは、教官に授業を紹介していただくかなくてはなりません。そこで、

学生に「どの教官のどの授業が、どのようによかったか」を率直に尋ねるアンケートを実施することにしました。ここには、授業のプラス面に注目し、それを共有する方途を探る方が（マイナス面を指摘して反省を求めるよりも）、授業の改善にははるかに有効であろう、との思いがこめられています。このアンケートの結果を参考に、何人かの候補者の中から、湯川洋司教授に研修会講師を依頼しました。

FD研修会

当日（3月5日）の参加者は、人文学部全教官のほぼ半数の方々。湯川教授は、資料をもとに、授業の方法について、その計画・実施法・宿題・評価・結果通知等々を具体的かつ詳細に解説し、さらにその精神、その問題点に論及なさいました。その後、活発な質疑応答がなされました。授業に関

する湯川教授の情熱、真摯さ、ご苦心のほどは、並大抵のものではなく、聴者をして肅然たらしめたのではなかったでしょうか。

なお12月には、情報環境整備委員会の協力を得て、情報 Consent 講習会を開催しています。

独自のFD活動の摸索

人文学部の“FD気運”の高まりは、全学IT関連FD研修会参加者数の多さにも見てとれます。確かに、人文学部の諸学にふさわしいFD活動はどうあるべきか、という重要な問題については、未だ摸索の段階であると言わざるを得ません。しかし、授業方法改善に関して、学部全教官に共通の場を設定した点をもって、学部のFD活動が確実な第一歩を踏み出した、と言うことはできるでしょう。



「山口大学の UI (University Identity) 確立に関する事業」進行中

坪郷 英彦

教授

人文学部

広報活動専門委員会担当委員

IDENTITYを辞書で引くと個性、独自性、自分自身(そのもの自体)であること、身元、正体とあります。UNIVERSITY IDENTITYは大学の個性、独自性ということになりますが、ここでは大学の個性、独自性を整えるためのプロセス、さらに成果としての具体的な色や形という意味で使っています。身近な例では国旗や家紋を思い浮かべて下さい。企業では1970年代からCorporate Identityが叫ばれ、例えばダイエー、マツダが早くからコーポレートカラー、ロゴマークを造りました。この目的はマークや色彩でその企業をすぐさま思い起こすことが出来るようにすることとともに、その作業の過程で会社社員の帰属意識を高めることにありました。しかし現在のCIを見てみると、どんどんロゴマークが変えられていくところが多く、企業の新規性をアピールすることがその主な目的になっているようです。

山口大学では昭和55年に山口大学創立30周年を記念してシンボルマークが作られましたが、十分な活用はなされませんでした。また、学生のサークル活動の際、例えばユニフォームのマークやカラーに統一したものが欲しいとの要求がかねてからありました。これらの状況を踏まえ、また、創立50周年を迎え、教育理念、目標が設定されたこの時期にUIを社会に浸透させるための事業を実施するに至りました。

平成13年度の教育研究特別経費が認められ、2年次計画の初年度事業として行いました。

このプロジェクトは初年度をUI確

立のための調査、すなわち大学内外の人々が抱く山口大学に対する意識調査にあて、これらの結果を受けて2年目に具体的なロゴタイプ、イメージカラーの設定と応用例としての広報媒体や、マニュアル作りを行うこととして計画されます。

平成13年度には大学在校生、高校生、地域社会の山口大学に対する意識調査を行いました。調査はベネッセコーポレーションに委託し、山口大学だけの調査分析だけでなく、他大学との比較も含めて行えるよう配慮しました。

調査内容の仕様策定に手間取り、具体的な実施項目の設定、委託先の決定が遅れ、在校生へのアンケート実施が後期の試験期間にかかるな

ど教職員の方々及び学生に多くのご迷惑をおかけしましたが、回収率も全体で72%と高く、事業実施への期待を感じさせるものとなりました。高校を含めた地域の方々からも積極的な協力をいただきました。3月末日で調査分析も終わり、ベネッセからの最終報告がありました。今後は13年度の意識調査から抽出される大学のイメージや期待の言葉を次のステップに引き継ぎ、予算措置後テキストを形、カラーに変える作業を行うこと、決まった形、カラーをどう使うかのマニュアルを作る作業が行われます。法人化へ向かうこの時期、総合大学としての統一イメージを形あるものにするにはまさにタイムリーな事業といえると思います。



TOPICS

学長退任記者会見

廣中学長 別れに熱きメッセージを語る！

5月15日付けで退任された廣中学長の退任記者会見が4月30日に事務局で行われました。

また、5月14日(火)は大学会館で学生を対象に最終講演を、翌15日(水)はSCS教室を主会場に医学部・工学部各遠隔講義室を利用して、教職員に退任の挨拶を送られました。そのメッセージを追ってみました。

地域が大切と思う存在に！(4月30日退任記者会見)

報道機関16社の参加があり、90分にも及ぶ熱の入った会見が行われました。

就任時の「超一流大学を目指す！」を達成するために山口大学で6年間取り組んできた大学改革推進の思い出を振り返り、その中で山口大学は50周

年までは「自力本願」であったが、それ以降は地域社会と連携し「他力本願」で、地域に必要なとされる大学づくりに努めてきました。大学が発展していくためには、今後も地域社会との連携が大切であると強調されました。

また、「この6年間を振り返って、自己採点をすると何点ですか。」という質問に、「今は助走で49点であるが、この6年間で取り組んできたことが活かされて、山口大学の前身ともいえる山口講堂200年祭にあたる2015年ころには行政や他大学、企業などと一体となる「環力本願」で、就任時に約束した「超一流」が実現されて、Jカーブを描いて満点になってもらいたい。」と自己評価、そしてこの助走を基に将来の「超一流」を期待されました。



読売新聞 平成14年5月1日掲載

TOPICS

素心無限！（5月14日退任講演）

「君たちは若く、未来があります。人には未来を見る能力はないが、未来を信じてポジティブに生きることが重要です。そうすれば現時点での生き方も良くなります。」また、「行き詰まったときは心の中の奢りやこだわりを捨て去って『素心』に戻ることが必要。」と、学生へ熱きメッセージを残されました。



法人化をチャンスに！（5月15日退任挨拶）

「これまでは税金を投入して、日本全国に大学がつくられ、ある意味で色々と規制を受けてきましたが、法人化後は大学自身で自治を考えて行かなければなりません。自治がしっかりできるか否かで、大学が繁栄するか衰退するかが決まります。法人化をチャンスだと思って、皆さん一丸となっ

て理想的な大学をつくってください。」とメッセージを残されました。

離任式では、事務局1号館玄関で学生や教職員から花束贈呈を受けた後、涙雨なのでしょう、傘の花のなか、大勢の見送りを受けながら、6年間の思い出を胸に山口大学を後にされました。

廣中学長、ありがとうございました。



山口新聞 平成34年5月16日掲載

（文責：総務部企画・広報室長 上谷克弘）

TOPICS

シンポジウム

第二回山口大学大学院 医学研究科応用医工学系シンポジウム

■ 中井 彰 教授 大学院医学研究科・応用医工学系

シンポジウムの目的

独立専攻系・応用医工学系シンポジウムが2002年5月17日、医学部霜仁会館で開催されました。2001年度に発足したこの新しい系は医学と工学が融合した大学院で、基礎研究の医学的・工学的応用をめざし、またそのような方向へ進む人材育成をめざしております。昨年の第一回目の本シンポジウムは、医工学が連携した応用的研究の方へ視点が向けられたシンポジウムでした。今回は2年目にあたり、応用研究が真に成果を上げるためには、応用できる独自の基礎研究も重要であるという観点から企画されました。

生体シグナルの解明をめざして

シンポジウムの内容は「ストレスに対する生体の戦略」としてテーマを絞ってみました。生体を受けるストレスは実に多種多様ですが、酸化ストレス、低酸素ストレス、それと熱ショック応答が多くの場合主要な要因になります。生体は外からのストレスに対して、多くの場合、最終的には遺伝子発現で対応いたします。シンポジウムは、これらのストレスの遺伝子発現の制御から始まり、

それらのストレスに伴う、これも多種多様な細胞内シグナル伝達で主要なものを取り上げました。最後は、シグナル伝達系が疾病とどう結びつくかでまとめました。このようなシグナルを理解し、新しい経路を探求することが応用研究として実を結ぶための基礎であると考えています。

大学院が山口大学の牽引役になう

学内6名と学外6名のシンポジストがまさに最先端の研究データを披露しました。Nature誌やScience誌に掲載された、あるいは掲載予定の研究が次々と紹介され、多くの聴講者が圧倒されたように思いました。討論の時間を十分に残していただくようお願いしましたところ、実に充実した議論を行うことができました。このようなシンポジウムによって、教官だけでなく大学院生が研究に対する情熱を再確認することで、研究が益々進むことを願っています。本シンポジウムは、廣中平祐前学長のご挨拶で始まり、加藤紘新学長のご挨拶で締めくくりました。この大学院独立専攻系が、これから向かってゆく大学の方角に大きく関わってゆくことは確かであることを感じました。



T O P I C S

地域病院との協定調印式

食中毒・災害等発生時における 患者食の相互援助に関する協定

■ 医学部附属病院

山口大学医学附属病院および、地域の総合病院を含む4病院は2月28日、食中毒・災害等発生時における患者食の相互援助に関する協定を結んだ。

山口大学医学部附属病院をはじめ各病院では、これまで食中毒発生防止に万全を期すための様々な視点から、体制整備に関する情報交換を行い安全管理に努めてきたが、今後は地域病院間の連携強化によって更なる安全管理の充実向上を目的に、2000年（平成12年）9月から2001年（平成13年）12月までの間、6回の会合を開き詳細検討を重ね、各機関の合意が得られたことから、この度協定書の調印が実現した。

調印式は山口大学医学部において、同附属病院の沖田 極病院長をはじめ、地域の総合病院の病院長および事務職員、栄養士が出席し、執り行われた。

これによって、食中毒や災害の発生に伴い、病院の調理施設が使用不能になった場合、協定の調印によって相互援助を行うこととなる。

調印後の記者会見で、沖田病院長は「安全に入院していただくため、給食には最大の関心を払わなければならない。今後は4病院がひとつになって対応できるので、実務面を的確に対処したい。」と抱負を述べた。



署名、調印する各病院長
左から篠崎宇部興産中央病院長、沖田山口大学医学部附属病院長
山下小野田市立病院長、伊藤山口労災病院長

TOPICS

病院だより

看護師のユニフォームが 変わります。 —天使も機能重視 脱白衣—



■ 榮木 実枝 医学部附属病院 看護部長



1. ユニフォーム変更の背景

全国的に看護師のキャップの廃止が進んでいる事から、当院の看護部でもキャップの廃止についてアンケート調査を行い、廃止の是非について検討しておりました。やはりキャップが点滴ルートやカーテンに引っかかり邪魔になる。かがむ作業の時にベッドの柵にあたったり等作業効率が悪い事、キャップにより患者様への事故があった事の原因から、平成14年度よりキャップの廃止を決定致しました。

キャップの廃止に伴い、キャップがなくても外見の印象が悪くないユニフォームの変更についても検討致しました。従来の白衣はワンピースタイプが多く、手を挙げたり、患者様の移動時等機能的に作業しにくい事、上、下に別れたユニフォームであっても「白」である事の弊害がある事から、白衣にこだわらずユニフォーム（作業衣）として

活動性のあるものを考えました。アメリカ、イギリス等海外でも、白衣を着ている看護職は殆どおりませんでした。やはり白衣では機能性に問題があるのでしょうか。当院でも救命救急センター、集中治療部、新生児集中治療部等は既に白衣ではなくピンクのユニフォームになっております。そこで一般病棟看護師のユニフォームも従来の白衣にこだわらず機能的なユニフォームにする事に致しました。

2. 新ユニフォーム

新しいユニフォームは、ブラウスとスラックスかスカートに致しました。ブラウスのカラーはピンクとブルーの2種類を個人の自由で選びます。

ブラウスの2色の持つ意味は、

ピンク 優しさを表し、ホルモンのバランスを整える効果があり、細胞を若返らせます。

ブルー 誠実、知性を表し、集中力を高める効果があります。

看護職にとって基本的に必要な要素を表したカラーに致しました。

スラックスとスカートは、ブラウスに合わせて紺色とし、引き締まった印象に致しました。

スラックスか、スカートかの選択も個人の自由です。動きやすさからスラックスの希望者が多いようですが、ブラウスのカラーもスラックスかスカートかもいろいろに取りあわせて自由な組み合わせで着用する事になるでしょう。

T O P I C S

ユニフォームの作成に時間がかかる事から、新採用者は4月から新ユニフォームになりますが、一斉に変更になるのは7月1日を目途としております。マタニティーの方、集中治療部等従来から白衣でない部署は従来どおりのユニフォームと致します。

3. ユニフォーム変更の目的

平成14年度において、従来とは全く違ったユニフォームに変更する事は大きな意味がありました。当院は、今年度47名もの大変な数の看護師が増員となりました。また、デジタルナースコールも本格稼動致します。従来のナースコールは、患者様のコールにすぐ対応できず、ナースステーションに戻らないと会話ができない旧式のナースコールでした。デジタルナースコールは、病棟の看護師全員がP H Sを持ち、患者様と直接すぐに会話でき、患者様のお名前も液晶画面で表示され、部屋移動の度に部屋入り口の名札を入れ替える必要がなくなりました。看護師の数も増え、働く環境が整えられた事からも、従来とは違う看護を示さなければなりません。看護職の名称も、白衣の天使のイメージをもつ看護婦から、より専門職としての意

味合いを強くした看護師に変わりました。

働きやすいスタイルで、今まで以上に看護師としての力を発揮しますという意識改革のためにも14年度の実施が必要でした。

4. 終わりに

今までの看護職のユニフォームは「白衣」というイメージがあまりにも強い事から、当分は新ユニフォームへの違和感があるだろうと思います。

機能性を考えてキャップの廃止も全国的な動きとなっておりまように、ユニフォームの考え方も当院のような考え方に変わっていく事になるだろうと思います。時代に先駆けたユニフォームの変更にご理解をいただきたいと思います。どうぞ写真を参考に、新しく変わる看護師にご期待下さい。

☎(0836) 22-2677

E-mail:yuh5686@hosp.Yamaguchi-u.ac.jp



TOPICS

NPO法人申請

農村と若者の橋渡し

特定非営利活動法人「学生耕作隊」(申請中)

■ 近藤 紀子 農学研究科修士課程1年 食糧資源情報学研究室 学生耕作隊理事長

課題の多い日本の農業

現在、日本の食料自給率は、カロリーベースで40%、穀物ベースで28%と著しく低く、日本は世界でも稀な低自給国家になっています。海外からは安い農産物が大量に輸入され、その結果、農産物の価格は低位安定しています。日本の農家が生産費を回収できない事態に陥ることもしばしばです。このような事情の中、農村からは若き担い手が姿を消し、過疎化、高齢化が進んでいます。それに伴って、農地の荒廃や、農村の有する多面的機能の喪失、農繁期におけるパートなどの短期的労働力の不足・高齢化も生じています。

見過ごされていた事実

このような農業事情の中、農業、農村を活性化するためには、どうしたら良いのだろうか、私は学部生の頃から考え続けていました。そして、私が特に注目したのは、農村に若者が少ないという点でした。その理由として、職業としての農業では、採算を合わせる事が難しいという点以外に、何かがある気がしてなりませんでした。



農業に興味のある若者は、現在増えています。私が昨秋、山口大学の一年生を中心に行った「大学生の農業に対する意識調査」では、全学部的一年生から1,370枚のアンケートを回収し、集計したところ、日本の食料事情に関心がある学生は68%、実際に生産現場で生産活動をしてみたいという学生は67%に上りました。つまり、3人に2人の学生が農業に興味があることが分かったのです。一方では農業に関心のある学生が多く、また、一方では若者を求める農村が多いというのに、両者の連携はできていませんでした。なぜならば、お互いを活用しあうきっかけがなかったからなのです。このことは当然の事のようにですが、見過ごされていた事実でした。

学生を中心に展開される援農グループの結成

そこで、学生が農繁期を中心に農家の農作業を支援し、また自ら耕作放棄地で作物を作り、放棄地を活用しながら農業への理解を深めるという活動を考えました。つまり、農村と若者をつなぐ架け橋を作るわけです。



T O P I C S



半年間の準備期間を経て、2002年1月15日、この農村と学生の橋渡しをする学生耕作隊を結成しました。当初任意の団体として活動していましたが、特に農業分野での活動は、永続させることが重要ですので、特定非営利活動法人として起業することに決めました。5月13日に県に申請を出し、早ければ9月に法人格を取得します。

現在の活動

学生耕作隊の活動は、基本的にボランティアですが、労働の対価として現金あるいは現物での報酬を受けるといった形で行っています。

現在の活動は、山口市均衡を中心に農作業支援や、



請負耕作をしています。具体的には、水稻作業支援や、いちごのランナ除去作業、梨の受粉作業、お茶、サツマイモ、スイカ、メロンの栽培などを行っています。支援に行っている農家の方からの評判は良く、口コミで依頼主が広がっています。

また、道場門前商店街「起業シティLet's」では、農・食・耕作Shop『大地』を出店し、農産物や農産加工品の販売もしており、そちらもリピーターがつくほどで、お客様には満足して頂いているようです。

現在、農作業支援の依頼は、南は長崎県から北は長野県まで、全国各地から届いています。今は、それらの全ての要請に応えることはできませんが、衰退する農業、農村の打開策の一つとして、将来的にはこの学生耕作隊を山口から全国展開していくことを目指しています。

山口市道場門前1-1-18 4F 起業シティLet's内
特定非営利活動法人学生耕作隊(申請中)

083-901-7818

090-7503-4197(携帯)

kondou@socio.gr.jp



筆者：右側

私の授業

おやじギャグの真価

中内伸光
助教授
理学部 数理科学科



だって、どんな状況になろうとも、
あわてず騒がず、周りの状況を
達観し、そして最後に一言、
「これでいいのだ」ですよ。
完璧じゃないですか。

「私の授業」の執筆依頼を受けました。私の授業は、ごく普通の授業なので、一旦はお断りしようかと思いましたが、昨今の風潮に対して、一言申し上げたいこともありまして、お引き受けすることに致しました。

おやじギャグの真価

私は関西人でもあり、最近、授業中は「山口大学おやじギャグ愛好会」（すみません、今、作りました）の会長として、「おやじギャグ」の普及を実践しています。何を不謹慎な、とお思いの方がおられるかも知れませんが、ちょっと考えてみて下さい。例えば、テレビ番組を見ているときに、それがどんなに内容の濃い番組でも、90分も見続けると、飽きてこないでしょうか？テレビならまだ、コマーシャルが入るので息抜きもできますし、チャンネルも変えられます。もちろん、「テレビ」と「講義」を一緒にしてはいけませんが、その一方で、あまり辛抱のない（失礼!!）若い世代が増えつつあるという現状もあります。（「90分ぐらい辛抱しろ」と思っているあなたは、立派なオッサン、もとい、大人です。）まあ、学生にとっては、毎日何コマも講義がありますから、毎回90分の授業を飽きずに聴くというのは、どだい無理な話です。そこで、授業の中のちょっとした「おやじギャグ」は「砂漠の中の小さなオアシス」、「野に咲く一輪の花」、はたま

た、「一服の清涼剤」で、これほど貴重なものはありません。おかげさまで、学生からは、「どこでツッコんでいいのか、全然わかりませんでした」とか、「ダジャレがとても寒いです」（そんなこと言うのはダレじゃ）とか、暖かい声援を受けながら、現在、授業を進めております。

昨今の風潮に一言

さて、このあたりで、いきなりですが、日頃思っていることを少し書いて、私の話の結論にしたいと思います。最近、ちまたでは（「ちまた」って、ひらがなで書くと、なんか変ですね）、授業に、パソコンなど情報関連の技術（information technology）、略して、IT（アイティー）を導入することが盛んに行われようとしています。便利な道具はどんどん用いるべきですし、環境の整備は大変良いことだと思うのですが、ともすれば、ITを導入することが主目的になり、そのことばかり先行して、肝心なものが置き去りにされているような気がします。やはり、授業は飽くまで、生身の人間同士の対話が基本であって、道具に過ぎないIT機器に幻想を抱くのは、それこそIT危機です。そのうちに、頭でも打って、

「あ、いてー」

（あ い て い ー）
と叫ぶことになるでしょう。

最後に宣伝を一つ

今年2月に、1年生向けのテキストを出しました。「数学の基礎体力をつけるための ろんりの練習帳」（共立出版）、低下、もとい、定価2,200円（税別）。めちゃくちゃ長いタイトルで、しかも、まじめな数学のテキストですが、よ〜く見ると、たぶん中身の5分の1ぐらいは、イラストとギャグです。（こんな本を出してくれて、共立出版さん、ありがとう。）初めて出版した本なので、だいぶ思い入れがあります。おやじギャグ、もとい、数学に興味をお持ちの方で、この本を書店で見かけられたときには、ぜひとも手にとって見てください。できれば、購入していただければ幸いです。（この宣伝が書きたかったから、今回の原稿の執筆を引き受けたに違いないな、やっぱり。）

&Fax:083-933-5661

E-mail:nakauchi@yamaguchi-u.ac.jp

私の研究

証券取引法の研究

芳賀 良
助教授
経済学部



昨年8月、経済学部学術振興基金の招聘により来日した Jonathan B. Forman教授 (University of Oklahoma, College of Law) と筆者 (右)

(1) はじめに

私の専門分野は、商法・証券取引法です。証券取引法（以下、証取法とします）の研究方法としては、次の2つに大別することができます。それは、証取法の比較法による研究（後述（2））と証取法の判例・裁判例に関する研究（後述（3））です。前者は、日本の証取法の解釈やあるべき規制の立法論を、外国の法規制と比較することによって探究するものです。後者は、証取法に関する判例・裁判例を研究対象とするものです。以下、それぞれを概観することとします。

(2) 比較法研究

まず、外国法と日本法の比較研究について、簡単に触れてみたいと思います。外国法を比較する前提として、当然のことながら、現行の日本法を正確に把握する必要があります。証取法は毎年のように改正が行われる分野であり、しかも多くの事項が内閣府令に委ねられています（このことが、

「証取法」を難解な科目としている一因でもあります）。比較法を行うためには、常に、法改正による制度の変更点などの最新状況を把握しておく必要があります。

比較の対象となる外国法は、日本の証取法の母法であるアメリカ法がまず挙げられます。また、大陸法系のフランス法やドイツ法の分析も必要な場合があります。法律学の場合、原典を分析・検討することが重要な意味を持ちますから、英語、フランス語、ドイツ語と格闘することとなります（学生時代にもっと勉強しておけばよかった、と後悔する今日この頃です）。

私が大学生の頃には想像できなかったのですが、現在は電子メールという便利なツールが普及しました。電子メールのお陰で、山口に居ながらにしてアメリカの研究者に対して、外国文献講読だけでは明らかとならない点について照会することができます。このことによって得られたアドバイスは、外国文献を分析する上でも重要な指針となります。上記のように外国法を分析し日本法と比較することによって、日本の現行法における解釈や制度の在り方について、示唆を得ることができます。この示唆が、あるべき解釈論や立法論への方向性を与えてくれるのです。

より具体的には、相場操縦規制を比較法によって分析しています。相場操縦とは、証券の価格を人為的に操作することをいいます。市場における自然な需給関係によって決定されるべき価格が相場操縦によって歪められると、市場の公正な価格形成機能が阻害されます。このような市場機能が害されると、証券への投資が手控えられ、証券取引が減少します。証券取引が衰退すると、企業の資金調達が困難になったり、個人年金等の財源となる資産の適切な運用を阻害します。このように、相場操縦のような不正な証券取引は、私たちの生活にも影響を及ぼすのです。諸外国の規制類型を分析・検討するという方法によって、このような相場操縦をどのようにして効率的に規制するのか、ということを明らかにするのが、私の研究課題です。

(3) 判例研究

判例研究は、証取法がどのような形で現実に応用されているのかを知る上で重要な役割を担っています。そもそも、証取法は、第二次大戦後の占領政策によって制定された経緯があります。その

ため、従来日本法に存在しなかった諸制度がアメリカ法から移入されました。また、バブル経済崩壊後、対症療法的に新設・改正された制度もあります。このようなことから、証取法には、他の法分野との整合性が欠けている点や制度相互の関係が不明確な点が潜在していることは否めません。そのため、実際の裁判の中で従来あまり議論されなかったことが争点となり、判決を一つの契機として議論が深化することがよくおこります。とりわけ証取法に関する最高裁判例は、その先例が非常に少ないこともあり、証取法の解釈と運用という観点から重要な分析対象となります。

例えば、本年2月13日に、証取法164条に関する

事件について最高裁大法廷判決が下されました。本条は、役員等に対して、短期売買によって得た利益を会社に提供させる規定ですが、その解釈を巡って争いがあります。本判決は、本条の趣旨とその要件について言及しました。本判決の射程を明らかにして、裁判実務に与える影響や規制の展望を予測することも判例研究の役割です。

比較法研究や判例研究は法学教育を行うための必須の要件ですから、おろそかにすることができません。今後もより精緻な分析を行いたいと思っています。

☎：083(933)5568

E-mail：haga@yamaguchi-u.ac.jp

私の研究

中心体複製機構

奥田 優
助手
農学部
獣医学科家畜内科学



染色体不安定性と癌

癌細胞は秩序を欠いた増殖を行う暴走車です。癌細胞の特徴の一つとして染色体数の異常がしばしば観察されます。このような染色体異数性を示す細胞の中からより悪性度の高い細胞が生じてくると考えられます。その原因として失われた染色体上にある重要な癌抑制遺伝子（ブレーキ）の喪失や余計に獲得された染色体上にある癌遺伝子（アクセル）の過剰により細胞が暴走することが予想

されます。この染色体不安定性の原因として細胞分裂の際の染色体分配の不均衡が考えられています。果たしてこのような染色体分配の不均衡はいかにして生じるのでしょうか。

中心体とは

中心体は有糸分裂時に2つの紡錘体極となり、中央に並んだ染色体の均等な分割に必要な不可欠な細胞内小器官です。この中心体が3つ以上形成される（中心体過剰複製）と染色体分配の不均衡が生じることが明らかとなってきました（図）。実際、ヒトやイヌの様々な腫瘍で中心体過剰複製が認められ、染色体不安定性が生じていることが明らかとなっています。異常を知るには正常を知らねばなりません。中心体の数はどのようにコントロールされているのでしょうか。

中心体複製機構

我々の体は日々傷つき、修復されています。この修復は、細胞が正しく分裂、増殖することによって行われています。細胞が複製する際、1つの親細胞から2つの娘細胞が生まれます。この際、細胞の設計図であるDNAが複製されています。すなわち、DNA量が2倍に増え、分裂して元の量に戻り、また2倍になり、分裂し、ということを繰り返して細

胞は増殖します。これは細胞周期と呼ばれています。一方、中心体ですが、細胞分裂後の娘細胞は1つの中心体しか持たないので、次の細胞分裂時までには複製されなければなりません。しかもこの複製は、1細胞周期中一度だけでなければなりません。なぜなら、複数回中心体の複製が行われると、中心体が過剰となり染色体分配の異常となるからです。すなわち、中心体複製周期は細胞周期と同調しておこなう必要があるのです。実際、正常細胞では中心体複製とDNA複製の開始が同調され、しかも一度複製された中心体は同じ細胞周期中には再複製されません。逆に、癌細胞では中心体複製とDNA複製の開始が同調されておらず、中心体が再複製され3つ以上となっている場合も少なくありません。しかしながら、中心体複製周期の分子機構に関する研究は始まったばかりであり、不明な点が多いのが実状です。

これまでの研究

1999年CDK2-サイクリンEがDNA複製と中心体複製の開始を同調していることが相次いで報告されました。これを受けて、我々は中心体上にあるNucleophosmin (NPM)という蛋白がCDK2-サイクリンE

によるリン酸化を受けて中心体から離れることにより中心体複製が開始されることを明らかにしました。面白いことにNPMは有糸分裂時に再び中心体上に戻ることによって、分裂後の娘細胞の中心体がNPMを持つようになり、NPMが中心体複製におけるある種のライセンス因子である可能性が明らかとなりました。以上の結果はCell誌に掲載されました。

今後の研究

これまでのところ中心体の再複製の抑制がどのようになされているかは不明です。現在、この分子機構を明らかにしようと研究を進めています。中心体の過剰複製は、腫瘍細胞の悪性化に重要な役割を果たしているものと考えられます。正常な中心体複製機構を明らかにすることは、細胞生物学的に重要であるばかりではなく、発癌の分子機構を知る上でも重要だと考えられます。将来的には癌の治療に臨床応用したいというのが夢です。

☎ (083) 933-5894

E-mail: okuda@agr.yamaguchi-u.ac.jp

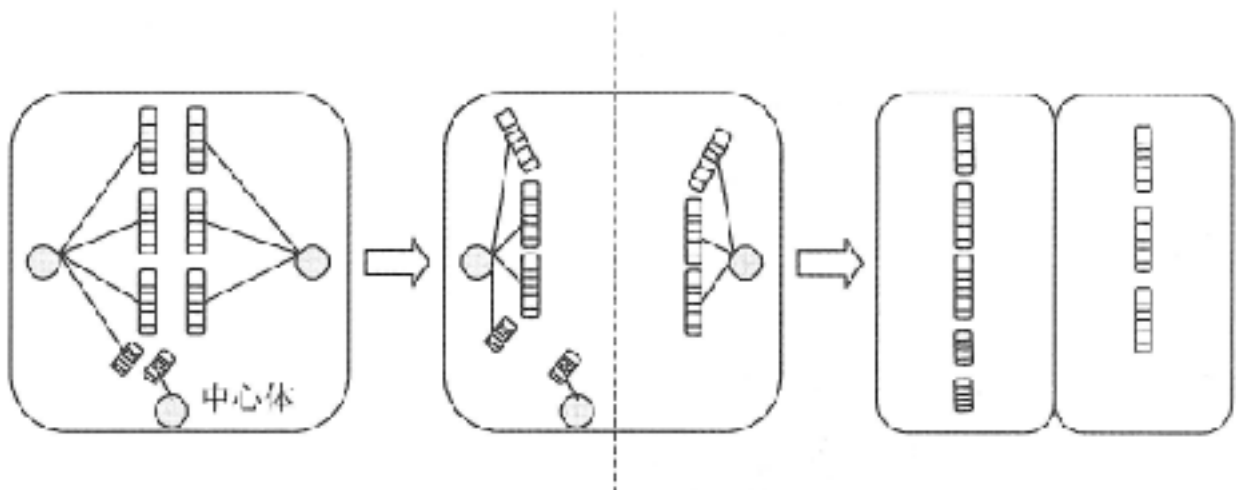


図 中心体過剰複製による染色体分配の不均衡

読者の声

マイノリティーの視点 「ブータンの政治」

(レオ・ローズ著、乾有恒訳、山本真弓監訳、
明石書店、2001年12月) **との出会い**



乾 有恒
大学院人文科学研究科 科目等履修生

1997年10月から山口大学人文学部の科目等履修生となり、わたしの第二の学生生活が始まった。それは、38年間、商社マンとして暮らし、その半分ぐらいを、駐在員として、あるいは、出張で海外生活を送ってきた後のことだった。貿易立国が叫ばれていた1960年に商社に入社して以来、当時の気概のままで突っ走ってきたわけだが、今では山口大学にお世話になって、ようやく心地ついたと思っている。4年あまりの勉強を通して、これまでの人生を振り返り、わたしなりに反省と自己再開発の機会に恵まれたからである。

わたしは幸運にも山口大学で多くのすばらしい先生方に接することができたが、その一番最初の出会いが人文学部の山本真弓先生だった。当時はまだ退職して3ヶ月しか経っていなかったので、商社時代の慣性がとれておらず、頭のなかが相変わらず闇雲に走り続けていたわたしは、山本先生の研究室へ受講許可を求めに伺い、短時間の面接で

すぐに受け入れていただいた。事務局の方は親切で、試験もなく、昔の卒業証明だけでよかった。それ以来、南アジア、特にネパール、バングラデシュ、スリランカ、ブータンを中心に、国家間、民族間にわたる政治文化を学んできた。わたしは特に、中近東と東欧での生活が比較的長かったので、かねがね民族問題には関心が強く、これらの勉強はとても興味深かったし、この地域に絶えない争いの原因を、様々な角度から考えるいい機会だったのである。

1998年10月から約1年のあいだは、レオ・ローズがブータンに長期滞在して調査・研究した成果「The Politics of Bhutan」を購読する授業であった。著者のレオ・ローズという学者は、カリフォルニア大学バークレー校の名誉教授で、ヒマラヤ地域研究の第一人者だと、授業で紹介された。中国とインドという大国に挟まれ、隣接する諸国とのあいだで複雑な問題を抱えてきたブータンの政治・歴史・文化を詳しく学んで、経済の規模はちがうものの、日本の置かれた立場の縮図を見る思いがした。チベット仏教王国ブータンが、ヒンドゥー教主流のインド寄り政策を採るかたや、精神的には独立国として、一定の距離をおきながら、中国（チベット）から、また大英インド帝国からも身を守ってきたたたかさに、ある種の感動さえ覚えた。



学生に戻ったわたしが若い彼とか彼女たちと共に学んでいるあいだに、ふと先生はこれを本にしようと決心されたようで、それから、先生とわたしの共同作業が続いて、昨年末にようやく、相当な量の解説を先生が付された単なる翻訳書ではない本を、トヨタ財団の翻訳出版助成金を得て、「ブータンの政治：近代化のなかのチベット仏教王国」として出版することができた。このような形で、社会人のわたしは、アカデミックな世界に足をそっと踏み入れることになった。本書に、あるいは、山本先生の授業に通奏しているのは、「マイノリ

ティーの視点であり、固定観念の打破」であると思う。自分に合う授業を選んで楽しめるというのは、以前は得られなかった社会人のメリットでもある。そして「いまどきの学生」という固定観念がそもそも大間違いであることにも、一緒にこの本を読んだ若い彼とか彼女たちを通して気がついた。「ブータンの政治」はいろんなことを教えてくれる格好の教材であった。

わたしのような社会人に門戸を開いてくださった諸先生方、大学当局および事務局の方々にも、この場を借りてお礼を申し上げたい。

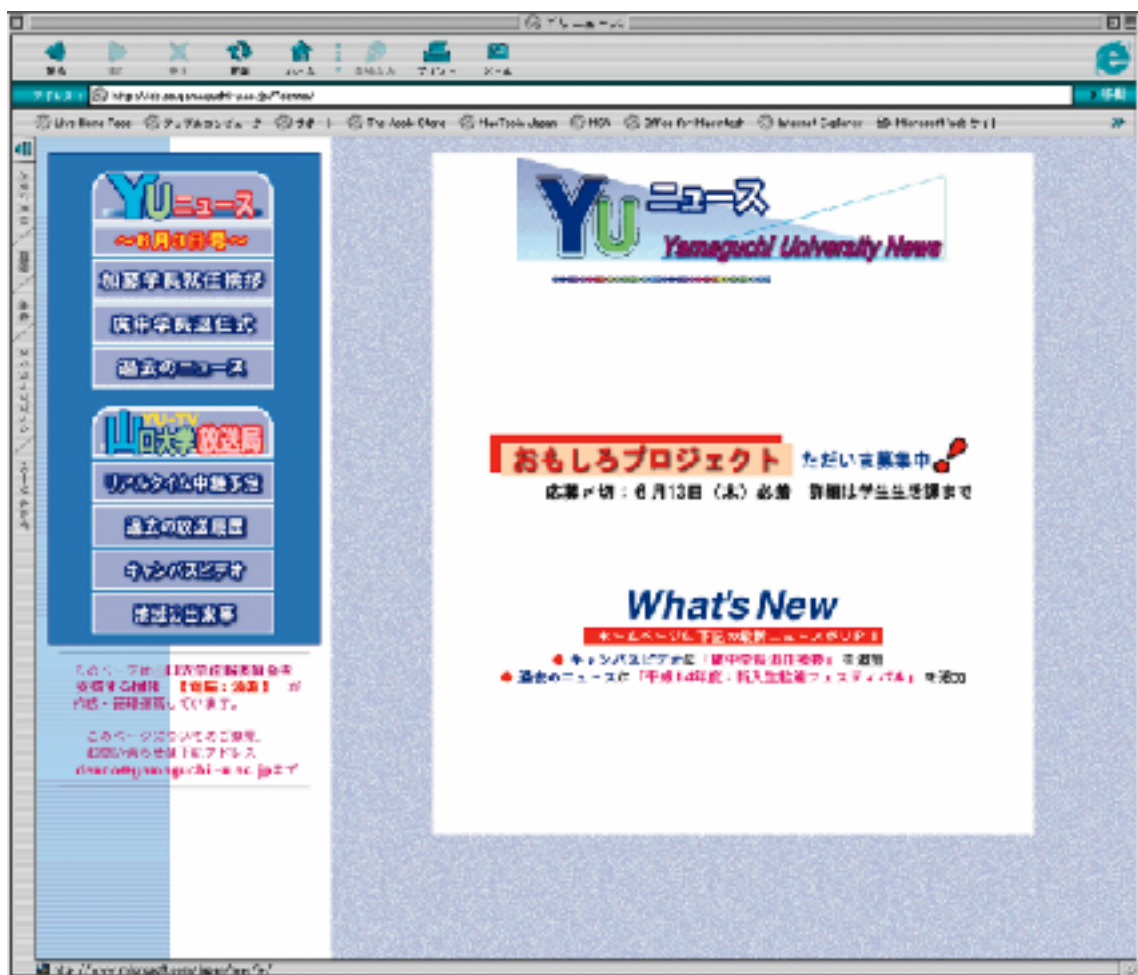


お知らせ

山口大学の出来事をお知らせするホームページを開設しました。
是非、ご覧ください。

山口大学ホームページ→YUニュース

<http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~denno/>



教官著作書の紹介



「MAINTAINING THE SAFETY OF DETERIORATING CIVIL INFRASTRUCTURES」

(山口大学メンテナンス工学研究所 2002年3月30日発刊)

都市高速道路網など社会基盤を支える構造物の質・量が高度に発達してきた日本を含む欧米先進諸国では、各種社会基盤構造物(道路、橋梁、鉄道、港湾、河川、ダム、上下水道など)の中に建設後かなりの年数が経過しているものがある。今後、これらの社会基盤構造物は年を重ねるごとに多くなるため、近い将来には、これら構造物の性能(機能)を可能な限り長持ちさせるとともに、環境とも調和させながら構造物の高齢化に対処していく「維持管理業務」が重大な社会問題となることが予想される。

本書は、今後増えるであろう社会基盤構造物の維持管理業務において必要となるライフサイクルコストの概念や分析手法およびライフサイクルを考慮した構造物の設計、また実用的な維持管理支援システムの開発に関する分野の最先端にある研究成果の公表ならびに議論の場となることを趣旨とし、2001年9月27日～29日の3日間、山口県宇部市の山口大学工学部において開催した「第2回International Workshop on Life-Cycle Cost Analysis and Design of Civil Infrastructure Systems (LCCワークショップ)」で発表された合計26編のKeynote papersおよびTechnical papersを収録したものである。会議では、これまで各種構造物を造る技術と比べると、どちらかというと地味な分野であった維持管理業務の分野を魅力あるものにするともに、限られた予算内で最大の効果を得るための最適維持管理計画の作成を合理的かつ効率的に実施することが必要となることより、この方面の研究および技術面の国際的な交流の必要性が認識された。なお、性能照査設計への移行などに伴う社会的関心の高まりを受け、LCCワークショップの主催を「山口大学工学部宮本研究室」および「リハテック研究会(注: (社)山口県技術交流協会内に設置されている「構造物の維持管理技術研究会」の略称)」とし、宇部市、(財)中国電力技術研究財団などの協賛を得た。

本書が、構造物の維持管理業務に興味のある研究者、技術者を世界最先端の研究成果に触れる場とすることができ、長寿構造物を守る分野を魅力ある、生き生きとしたものとするに役立つことを期待したい。

宮本文穂 教授 工学部 / Dan M. Frangopol 教授 米国コロラド大学工学部



「有事法制とは何か一その史的検証と現段階」

(インパクト出版会 2002年3月25日)

戦前期における国家緊急権の史的検証を目的に執筆した論文をベースにし、戦後における防衛庁防衛研究所を中心として進められてきた有事法制研究をも整理分析したもの。研究史的には、戦前期から戦後を通底する政軍関係史研究の一環として位置づけられている。筆者が長年研究の対象としてきた政軍関係の視点から言えば、今日の有事法制整備により、戦後形成されたきた文民統制の政軍関係が、大きく構造転換を迫られる結果となることを憂えざるを得ない。その根拠を戦前期の歴史過程の分析により提示することが、本書執筆の主要な動機であった。同著を準備中から有事法制問題が大きく浮上するところとなり、本書は刊行して直後から研究者だけでなく、同問題に関心ある市民や学生・労働者、マスコミや政治家にも読書層が広がっているようだ。現在、次の本の執筆に入っているが、当分は本書刊行を機会に有事法制関連の仕事に追われる日々となってしまった。本書の構成は、「第一章 明治国家の有事・非常時対策を追う、第二章 戦前期危機管理の実体を探る、第三章 強化される行政の軍事化、第四章 国家総動員法成立前後の有事法制、第五章 戦後期日本有事法制研究の展開、第六章 周辺事態法から新有事立法へ、第七章 有事法制の現段階とテロ対策関連三法」である。

額 厚 教授 人文学部



「フードシステムの地理学的研究」

(大明堂 2002年2月20日)

遅ればせながらようやく上梓した学位論文本である。やや時代がかったタイトルは あえて採用したものであるが、図らずも中身は昨今関心を集めている事象と重なった と思っている。一連の狂牛病騒動や産地表示の偽装問題あるいは遺伝子組み替え作物の混入問題などは、違法な操作をした、あるいは疑惑をもたれた組織や機関の姿勢や対応を問うことのみではとうてい解決のつかない構造的な背景をはらんでいる。構造的背景とは大規模生産と大規模消費およびコストの削減を前提にして、世界規模で増殖を続ける今日の高度な食料供給システムの存在である。そのシステムに対して筆者の一応のディシプリンである地理学の立場からのアプローチ、そのはじめの一步がこ の本である。

この手の本の常として、束ねた論文の書かれた時期は決して新しいとは言えない。主なものが書かれたのは5年ほど前である。目下筆者の対象はこの本で対象にしたわが国の食料供給システムの分析から、インドを経て中国、韓国のそれ、さらにアジアを結ぶ食料供給システムへと変化している。それでもやはり、プロトタイプを構築したのはここに収められた一連の論文によってである。

まだ出版からあまり間がないので、書評の狙上にはあがっていないが、身の回りからは、「本編はともかく、あとがきはおもしろかった」との声が届いている。願わくば本編もそうありがたいものである。

荒木 一視 助教授 教育学部



新聞掲載された山大・地域から見た山大

3月

- ◆山大学長選の1次選挙投票 きょう開票
(朝日・中国・宇部:1日)
- ◆油絵やCG55点展示 山大美術部が卒業制作展
(山口:3日)
- ◆山大学長選 加藤医学部長・村田副学長
上位2氏、決選へ (朝日・山口・毎日・中国・読売:2日)
- ◆教養教育の充実目指し 一山口大—
[全新入生にTOEIC] (毎日:6日)
- ◆提言実践例を報告 一山口大諮問会議に—
学生指導や国際化 (中国・山口・読売:6日)
- ◆九州大か 山大の獣医学科総合再編へ2派 [鳥取大か]
地方の特色生かせ 鳥大派・国際水準へ大連合 九大派
(山口:11日)
- ◆山大がMOT教育推進をPR 15日シンポと交流会
(宇部:7日)
- ◆宇部の茶畑で初仕事
「学生耕作隊」4人が汗 (西日本:7日、中国:11日)
- ◆1400人に春到来 山口大で合格発表
(朝日・毎日・中国・山口:9日)
- ◆山大教育学部・竹重友佳理さんが大内文化と国際交流を
卒論テーマに「ふるさとに無知だった自分の意識改革にも」
(サンデー山口:10日)
- ◆「医療福祉産業創出を」産学官連携フォーラム
19日宇部 (山口:9日)
- ◆国立初…講義は「官庁流」
来年度から山口大が中国運輸局と提携
(朝日:12日、中国:13日)
- ◆医療産業育成へ研究施設 一宇部市—
山口大学医学部に 企業に入居呼びかけ (日経:13日)
- ◆山大と県立大で後期試験始まる 千300人が受ける
(山口・中国:13日)
- ◆山口大次期学長きょう正式決定 (山口・中国・朝日:14日)
- ◆人文、教育学部も導入 一03年度山口大—
AO入試6学部で (毎日・山口:15日)
- ◆山口大学長に加藤氏 改革に意欲
世界に通じる人材を、法人化控え機能強化
(朝日・日経・読売・西日本・山口・中国:15日)
- ◆大坂学部長が3選 一工学部— (中国・山口:15日)
- ◆小林山大教授ら4人に援助金
宇部興産学術振興財団発表
(山口・西日本:15日、毎日:20日)
- ◆産学提携情報HPで発信中 一山大— (朝日:15日)
- ◆鷺流狂言をPR
山口大でフォーラム 講演や保存会熱演 (中国:18日)
- ◆「天使、も機能重視」白衣廃止 一山口大病院—
シャツにズボン、スカート キャップもやめる (読売:18日)
- ◆コミュニティビジネス育成 競売方式で起業提案
山口チャレンジセンター参加者の出資募る (日経:21日)
- ◆科学の不思議 子ども体験 一山大理学部—
(朝日:22日)
- ◆山大など大半「良好」 国立大の社会貢献度公表
文科省機構甘めの評価 (山口:23日)
- ◆迷走国立大の獣医学科統合「看板、手放せぬ」
研究水準世界と大差 (朝日:25日)
- ◆山大後期日程632人が合格 (山口:24日)
- ◆研究者データ公開 一山大など—
ネットで千688人分産学官の連携推進 (山口:26日)
- ◆卒業生もユニーク作品
山工学部書道部展 (宇部時報:29日)
- ◆運輸行政論を開講 一山大経済学部—
中国運輸局と連携 講師に部課長10人 (山口:29日)

- ◆教育学部の存続を要望
山口大学長に山口商議所 (中国:30日)
- ◆公開起業オークション
NPO「学生耕作隊」に126万円出資
小野の山大学生近藤さん起業をめざす (宇部時報:30日)
- ◆広中先生算数教えて 一山口大生とNPO法人—
教材PCソフト開発 (中国:30日)
- ◆ミクロの不純物有害物を分離 「機能性膜」さらに進化
山口大学工学部助教授 喜多 英敏氏に聞く
(読売:31日)

4月

- ◆古代中国散歩など6講座
山口大「サタデーカレッジ」—受講生募集— (山口:3日)
- ◆公開講義の聴講生募集 一山口大経済学部—
(読売:3日)
- ◆山口大卒論テーマ 学外から22件採用 (読売:6日)
- ◆山大の留学生夫婦が秋芳ナシの授粉体験 (山口:9日)
- ◆山口大入学式 7学部・大学院に2700人
「君たちには未来がある」来月退任広中学長がスピーチ
(毎日・山口・西日本・読売:10日)
- ◆学生起業家熱く語れ! 一山口大経済学部で講義—
在学生自ら企画・運営 (日経・中国:10日)
- ◆山大新留学生に生活必需品贈る 交流会が43人に
(山口:10日)
- ◆アフガン情勢詳しく知ろう 一山大で19日シンポ
(山口:11日)
- ◆若者起業家リレー講義
山大で開講 学生が企画・運営 (山口:12日、朝日:13日)
- ◆山大医学部長に石原教授を選出
(山口・朝日・西日本・宇部:12日)
- ◆知的クラスター試行地域に 県など4者共同提案やまぐち・
うべ構想 次世代医療機器の開発などを期待
(宇部・朝日:16日、防長:21日)
- ◆今年度も31種の「出前講義」 一山口大工学部—
先端技術の現状、将来紹介 (宇部:16日)
- ◆知りたいやまぐち 一山口大農学部教授 糸原 義人氏
共同農地で再生の芽 農業・農村② (朝日:19日、26日)
- ◆月曜インタビュー 山口大学次期学長 加藤 紘さん
世界に通じる大学めざす (山口:22日)
- ◆山大カラーを発信
大学教育センター、留学生センター新設
(山口・中国・毎日・朝日・宇部時報:24日)
- ◆山大後援財団設立へ 一発起人会—
(山口・中国・朝日:24日)
- ◆私の有事法制論 一山口大教授 額田 厚氏—
平和原理の国家から変質 (朝日:24日)
- ◆山口の火山展始まる
一県立山口博物館・山大機器分析センター主催—
歴史や特徴を紹介 (山口:26日)
- ◆電波望遠鏡で天体観測 一山口大学と国立天文台—
山口のパラボラ 改造し年度内開始
(山口・日経・読売・西日本:25日、中国:29日)
- ◆山大6サークルあすまで芸術祭
山口きょう演劇公演 (山口:25日)
- ◆研・究・室から 一山口大学時間額研究所—
21世紀の価値観、専門超え模索 (朝日:30日)

公開講座のお知らせ

講 座 名	開設期間	受講対象者	開催会場	問 合 せ 先
異文化交 流 コー ス 「古代中国散歩」	5月11日(土) 6月29日(土) [毎週土曜日開講]	市 民 一 般 生 学 生	山 口 大 学 学 部 室 人 文 講 義 室	山口大学人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間4月上旬～5月10日)
外国語学習コース(英語) 「短編小説で 英語と異文化を」	5月18日(土) 7月13日(土) [毎週土曜日開講]	市 民 一 般 生 学 生	山 口 大 学 学 部 室 人 文 講 義 室	山口大学人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間4月上旬～5月10日)
現 代 文 化 コー ス 「エスぺラントの 文化と理想」	5月11日(土) 6月29日(土) [毎週土曜日開講]	市 民 一 般 生 学 生	山 口 大 学 学 部 室 人 文 講 義 室	山口大学人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間4月上旬～5月10日)
保 育 材 実 習	8月1日(木) 8月2日(金)	保育園教諭 保 育 士	山 口 大 学 学 部 室 教 育 4 0 5 演 習 室	山口大学教育学部庶務係 TEL 083-933-5300 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間7月1日～7月26日)
動物のいる楽しい暮らし ～チョット専門的な 動物のお話～	8月17日(土) 8月31日(土)	市 民 一 般 生 学 生	ぱるるプラザ 山口小会議室	山口大学農学部研究協力係 TEL 083-933-5810 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間7月15日～8月10日)
理 科 実 験 講 座	8月5日(月) 8月6日(火)	小学校教諭 中学校教諭	山 口 大 学 学 部 室 教 育 2 5 番 教 室	山口大学教育学部庶務係 TEL 083-933-5300 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間7月1日～7月22日)
木 工 入 門	8月23日(金) 8月25日(日)	市 民 一 般	山 口 大 学 学 部 室 教 育 工 加 木 実 験 工 室	山口大学教育学部庶務係 TEL 083-933-5300 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間7月1日～8月20日)
ヒューマンスクール 宗 教 と 文 化	10月2日(水) 12月11日(水)	市 民 一 般	山 口 大 学 学 部 室 教 育 2 2 番 教 室	山口大学教育学部庶務係 TEL 083-933-5300 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間9月1日～9月18日)
わが国の構造改革を問う	10月3日(木) 11月7日(木)	市 民 一 般	山 口 大 学 学 部 室 経 済 学 部 B 棟 2 0 2	山口大学経済学部庶務係 TEL 083-933-5500 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間9月2日～9月19日)
外国語学習コース(ドイツ語) 「グリム童話を最終版と 初版で読む」	10月5日(土) 12月7日(土) [毎週土曜日開講]	市 民 一 般 生 学 生	山 口 大 学 学 部 室 人 文 講 義 室	山口大学人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間4月上旬～10月4日)
日 本 文 化 コー ス 「あなたの言葉にわたしの ことばを見つめる」	10月5日(土) 12月14日(土) [毎週土曜日開講]	市 民 一 般 生 学 生	山 口 大 学 学 部 室 人 文 講 義 室	山口大学人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間4月上旬～10月4日)
やまぐち学 コー ス 「近 世 の 山 口」	10月5日(土) 10月26日(土) [毎週土曜日開講]	市 民 一 般 生 学 生	山 口 大 学 学 部 室 人 文 講 義 室	山口大学人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間4月上旬～10月4日)
失業問題の多面的検討	11月14日(木) 12月19日(木)	市 民 一 般	山 口 大 学 学 部 室 経 済 学 部 B 棟 2 0 2	山口大学経済学部庶務係 TEL 083-933-5500 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間10月11日～10月31日)
地 域 の 福 祉 事 業 と マ ネ ジ メ ン ト	10月 (詳細は未定)	市 民 一 般	未 定	山口大学経済学部庶務係 TEL 083-933-5500 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間9月詳細は未定)
ロボットのしくみを知って 動 か し て み よ う	10月26日(土)	中・高 校 生 及 び 市 民 一 般	山 口 大 学 学 部 室 工 学 部 機 械・社 建 棟 講 義 室 及 び セ ミ ナー 室	山口大学工学部総務係 TEL 0836-85-9003 住所 宇部市常盤台2丁目16-1 (募集期間9月詳細は未定)

徳山駅が私のキャンパス

徳山サテライト カレッジ

会場 市民交流センター

県内5つの高等教育機関
と徳山市が共同で開催す
る徳山サテライトカレッ
ジ。実際に各学校で行わ
れている講義を、そのま
まの形でお届けします。
講義時間は1講義あたり
おおむね90～120分。

No.1 現代やまぐち社会論(山口大学)

5/20, 6/3, 6/17, 7/1, 7/3, 7/22, 8/5 全7回 各々曜日13:30～ 2000円

No.2 漢詩にアタック(山口大学)

10/7, 10/21, 10/28, 11/11, 11/18, 11/25, 12/2, 12/9 全8回 各々曜日13:00～ 2000円

No.3 狂牛から人類は何を学ぶべきか！(山口県立大学)

5/14, 5/28, 6/11, 6/25, 7/9, 7/23, 8/13, 8/27, 9/10, 9/24 全10回 各火曜日19:00～ 3000円

No.4 今、なぜ環境か！(山口県立大学)

10/8, 10/22, 11/12, 11/26, 12/10, 1/14, 1/28, 2/25, 3/11, 3/25 全10回 各火曜日19:00～ 3000円

No.5 ベンチャービジネス論1(徳山大学)

4/17, 5/1, 5/22, 6/5, 6/19, 7/3 全6回(1回2コマ) 各水曜日17:00～(90分×2) 無料

No.6 中堅・中小企業の海外事業活動(徳山女子短期大学)

5/10, 5/24, 5/31, 6/21, 7/5 全5回 各金曜日19:00～ 1500円

No.7 環境蘇生化技術としてのマイクロバブル(徳山高専)

5/9, 6/16 全2回 各水曜日18:00～ 1000円

No.8 まちと住まいの教養講座(徳山高専)

5/6, 6/13, 6/20, 6/27 全4回 各水曜日18:00～ 2000円

No.9 水の流れ、空気の流れの豆知識(徳山高専)

7/4, 7/11 全2回 各木曜日18:00～ 1000円

No.10 電気通信工事担任者資格講座1(徳山高専)

9/5, 9/12, 9/19, 9/26, 10/3, 10/10, 10/17, 10/24 全8回 各木曜日18:30～ 2000円

No.11 身近な計測と感性のおはなし(徳山高専)

11/7, 11/14 全2回 各木曜日18:00～ 1000円

No.12 身近な情報通信のおはなし(徳山高専)

11/21, 11/28 全2回 各木曜日18:00～ 1000円

No.13 ものの強さと振動のおはなし(徳山高専)

12/5, 12/12, 12/19 全3回 各木曜日18:00～ 1500円



受講生
募集中！

■申込み 電話、FAXまたはEメールで徳山市役所企画調整課内の徳山サテライト
カレッジ運営実行委員会事務局までお申込みください。
TEL(22)8478 FAX(22)8475 メールアドレス kikaku@city.tokuyama.yamaguchi.jp

原稿をお寄せ下さい

広報誌は、学内だけでなく、山口県内の高校以上の教育機関、地方自治体及び主として、中国・四国地区の企業等学外の約500の機関に配布します。

ア. Q&A欄について

山口大学についての質問をお寄せください。質問は、お名前、所属、職(学生の場合は学年)、年齢を付して文書でお願いします。Q&A欄に採用させていただくときは、字数などの関係で文章を一部修正させていただくことがありますのでご了承ください。学外からの質問を歓迎します。

イ. 催し物について

公開講座、学会、研究会等の開催計画がありましたら、日時、場所、名称、責任者氏名、所属、電話番号などをお知らせください。

ウ. 「私の授業」「私の研究」「国際交流」「山口大学の将来についての提言」など

「私の授業」「私の研究」では、日頃おやりになっていることを、高校生にもわかるように、やさしく述べていただければと存じます。また、昨今、大学の将来についての関心が高くなっています。そこで、山口大学の将来のあるべき姿について、学内外から原稿をいただければ幸いです。建設的なご意見を期待します。

【執筆要領】

上記ウについて、執筆要領は次のとおりです。

1. 原稿(図、表を含む。)は40字×40行で、できるだけワープロでお願いします。第1行は題名、2行目は氏名、所属部局名、研究室あるいは講座名、職、本文は4行目から始めてください。本文は3～4に区分し、小見出しをつけてください。

読者が連絡や質問をされる場合に便利かと思うしますので、お差し支えなければ、原稿の末尾に研究室などの電話番号を括弧書きにしてください。

原稿は次の枠内のような形になります。

ワープロを用いない場合は、400字詰原稿用紙4枚以内で、ワープロの場合の要領に準じてお願いします。

ワープロで原稿を作成された場合、お差し支えなければ原稿と一緒にフロッピーをお貸しいただければ幸甚に存じます。

第1行 題名
第2行 氏名、所属部局名、研究室名、職
第3行 (空白)
第4行 本文始まり
.
.
第40行 本文終わり
(TEL _____)

2. ご自分が写っている写真を一枚と本文に関連する写真も添付してください。研究や授業の場面の写真を歓迎します。

原稿には締切期限を設けません。適宜、下記までお送りください。そのほか、種々の問い合わせも下記まで。また、原稿はE-mailで送っていただいても結構です。

〒753-8511

山口市吉田1677-1

山口大学総務部企画・広報室

広報・調査係長 有吉義和

☎ 083-933-5007 FAX 083-933-5013

E-mail: yuinfo@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

編集後記

今年の桜は開花が早く、入学式には新緑に変わっていました。新しい年度になり、山口大学は新学長のもとにさらに充実させようとしています。本号の特集は、そうした新しく充実しようとしている大学の姿を紹介しています。学長からのメッセージ、大学教育センターをはじめとする諸施設を紹介し、今後の大学の充実をお伝えするものです。なお、本年度より本誌も若干の見直しを行い、発行の時期に合わせた内容をより詳しくお伝えしようと思っています。

(福田隆眞)

©山口大学ホームページhttp://www.yamaguchi-u.ac.jp/index_j.html

山口大学広報第六十一号

平成十四年五月二十日発行

編集発行 山口大学広報委員会

(総務部企画・広報室)

住所：山口市大字吉田一六七七一

電話：(083) 933-5007

FAX：(083) 933-5013

E-mail : yuinfo@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

印刷：有限会社三共印刷

広報活動専門委員会委員

小谷 典子 (委員長 人文学部)

坪郷 英彦 (人文学部)

福田 隆眞 (教育学部)

マルク・レール (経済学部)

小宮 克弘 (理学部)

高橋 睦夫 (医学部)

森田 昌行 (工学部)

宇佐見晃一 (農学部)

善甫 宣哉 (附属病院)

専門委員

堀江 穆 (アドミッションセンター)

熊谷 武洋 (教育学部)

小林 邦和 (工学部)